

長井盆地の縄文時代中期から後期前葉の集落跡

菅原哲文

1 はじめに

山形県の南部に位置する長井盆地は、盆地の中央に長井市があり、北部は白鷹町、南部は飯豊町が位置している。当地域は、長井市教育委員会や山形県教委委員会、山形県埋蔵文化財センターによって縄文時代中期や後期前葉の遺跡が調査され当期の集落の内容が明らかにされている。また盆地北部の白鷹町では、岡ノ台遺跡の調査が行われた。縄文時代中期末の複式炉をもつ住居跡や、弥生時代の竪穴住居跡などが確認されている。山形県埋蔵文化財センターの報告書で、住居跡出土の中期末の土器や遺構が紹介されている（名和・渡辺 1994）。

ここでは岡ノ台遺跡の中期末の出土土器や遺跡内容の検討を行い、当遺跡と周辺の遺跡との関係を考えることとする。そして、長井盆地内の中期から後期前葉の集落の様相と遺跡間関係もあわせて検討していきたい。

2 岡ノ台遺跡の概要

遺跡は、山形県西置賜郡白鷹町大字畔藤字岡ノ台に所在する（図1）。最上川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は189～193mを測る。東西500m、南北450mの広がりを持つ。遺跡の南側は耳堂川が、北側は思川が西に流れ最上川に合流する。

一般国道287号線道路改良工事により、1993年に路線内の3,017㎡について、（財）山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し報告書が刊行された（名和・渡辺 1994）。時代幅がある複合遺跡で、縄文時代前期・中期前葉～後葉・後期前葉・晩期中葉～後葉・弥生時代・古墳時代・平安時代の各時期にわたる。南側調査区は古墳時代の集落跡、中央調査区は平安時代の集落跡、北側調査区は縄文時代・弥生時代を主とする集落跡が確認された（図2・3）。

今回詳細について触れるのは、北側調査区の縄文時代中期末の竪穴住居跡と出土土器である。

3 中期末の出土土器について

埋蔵文化財センターの報告書で写真が掲載されている、縄文時代中期末大木10式期のST2・6の2棟の竪穴住居跡から出土した縄文土器について、実測図を作成し観察を行った（図4～6・表1）。以下、資料の内容について記述する。

図4-1～3、図5-4はST2竪穴住居跡出土土器である。

図4-1は、複式炉EL250の埋設土器に使用されていた深鉢である。体部中央が残存し、口縁や体部下、底部を欠く。文様は隆帯による稜線と隆沈線によって描かれる。縦方向に展開するS字状やU字状の区画文様を描き、内部に縄文を充填している。S字状、U字状文は規則的に配置される。文様間には稜線による波状文を巡らせるものと思われる。意匠により、大木10式古段階に位置付けられる¹⁾。

図4-2は、同じ複式炉の埋設土器となる深鉢で、1の土器の内側に据えられたものである。1と同様に体部中央のみが残存する。縄文のみが施される個体である。

図4-3は遺物番号RP31の土器で、外傾する器形の深鉢である。口縁に環状の把手が1つ付く。文様は口縁部に、稜線によって区画された無文部が切りあうコの字状の文様が横方向に展開する。文様区画内と体下半には縄文が施文される。大木10式新段階に位置付けられると考えられる。

図5-4は、注口が付いたミニチュア土器である。高さは5.2cm、胴部最大径は4.8cmである。注口部以外に開口部は無い。土器の頂部にかけて粘土紐を把手状に交わるように2本交差させている。文様は体部中央に無文帯を一周させ、また土器頂部から斜方向に無文帯が垂下し中央無文帯と交差する。底部付近も無文となる。無文部は丁寧に調整される。注口土器のミニチュアはあまり類例を見かけず珍しい。文様から判断すると、大木10式新段階に位置付けられると考えられる。

図 5-5・6、図 6-7 は ST6 竪穴住居跡出土土器である。

図 5-5 は、EL251 複式炉の炉埋設土器である。深鉢で口縁部がやや内湾し、口縁端が外反する。体部下と底部は欠損する。文様は、隆帯による稜線文と隆沈線による波頭文が施される。波頭文内には縄文が充填されるが、刺突文が充填される箇所もある。大木 10 式中段階に位置付けられると思われる。

図 5-6 は、同じ複式炉内に埋設された土器である。深鉢の体部上半部で、体部下半と底部を欠く。全体に縄文が施される。

その他、報告書に掲載されている中期末の土器についても併せて検討を行う。

図 6-7 は、ST6 竪穴住居跡 EL251 複式炉覆土より出土した深鉢の口縁部破片である。稜線状の隆沈線に囲まれた無文部分が主体の S 字状の文様が施される。大木 10 式新段階と考えられる。

図 6-8~11 は、ST7 竪穴住居跡内から出土した深鉢体部破片で、同一個体と考えられる。いずれも隆沈線区画で内部に縄文が施される充填縄文による楕円状の文様

が描かれる。全体の文様の形状は不明であるが、大木 9 式新段階~大木 10 式古段階に位置付けられる。

4 遺跡内の中期末の遺構

大木 10 式期の ST2、ST6 竪穴住居跡について、炉埋設土器の時期を含め、内容を確認する (図 7)。

ST2 竪穴住居跡は、平面形はほぼ円形で、長軸 4.3 m、短軸 3.98 m、深さ 35cm の規模である。支柱穴は 3 本柱構成と考えられる。複式炉 EL250 は、長軸 2.08 m、短軸 0.77 m で、土器埋設部、石組部、前庭部が確認される。埋設土器周辺は石組等が認められず、石組部も敷石が欠落している部分が認められるが、住居廃絶後に石組の石の抜き取りが行われた可能性がある。

埋設土器 (図 4-1) は大木 10 式古段階であり、この時期が住居跡の構築時期と考えられる。住居跡の覆土下層や床面出土土器は大木 10 式新段階で、埋没過程に時間差が認められる。

ST6 竪穴住居跡は、長軸 5.14 m、深さ 57cm、平面形は隅丸方形状になると思われる。住居内にピットが 1 基認められるが、支柱穴の配置は不明である。複式炉

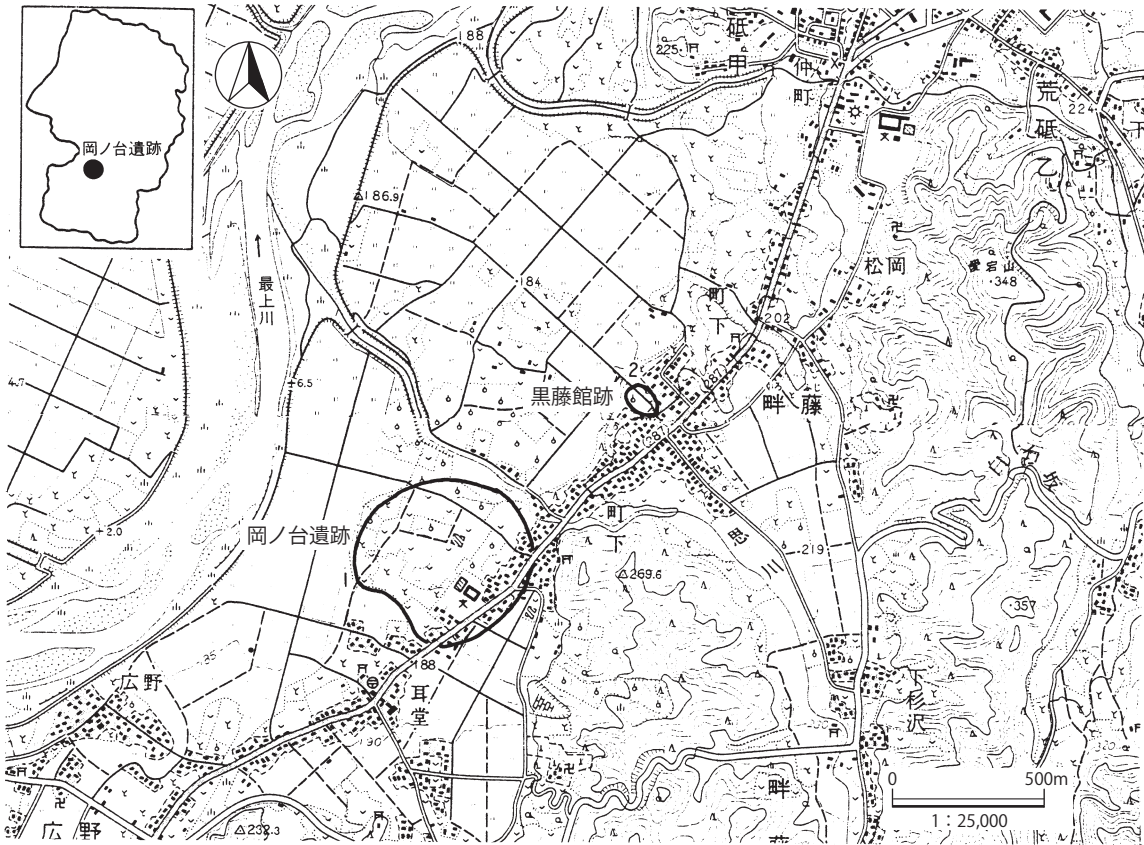


図 1 岡ノ台遺跡位置図

EL251は長軸2.12m、短軸0.85m、土器埋設部、石組部、前庭部が確認される。埋設土器の周りには、石組が認められるが、東側が欠落している。

図5-5 (RP39a)の埋設土器は、大木10式中段階であり、この時期が住居跡の構築時期と考えられる。また、図5-6 (RP39b)は、古い時期の炉に伴う埋設土器と考えられる。

その他、ST7 竪穴住居跡内から図6-8~11の大木9式新段階~大木10式古段階の土器が出土しているが、

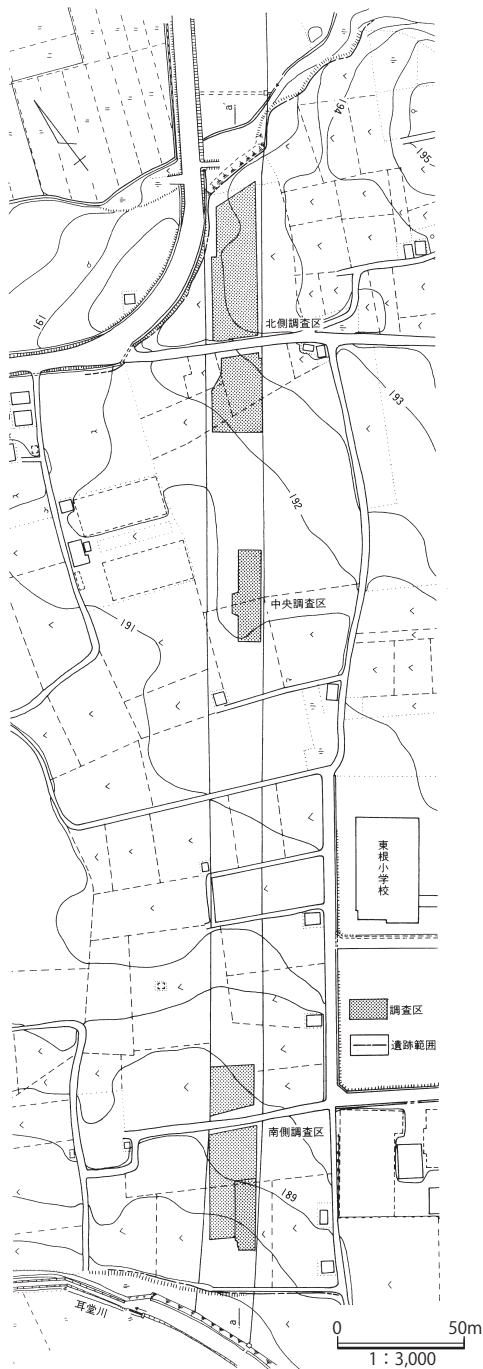


図2 岡ノ台遺跡調査区配置図

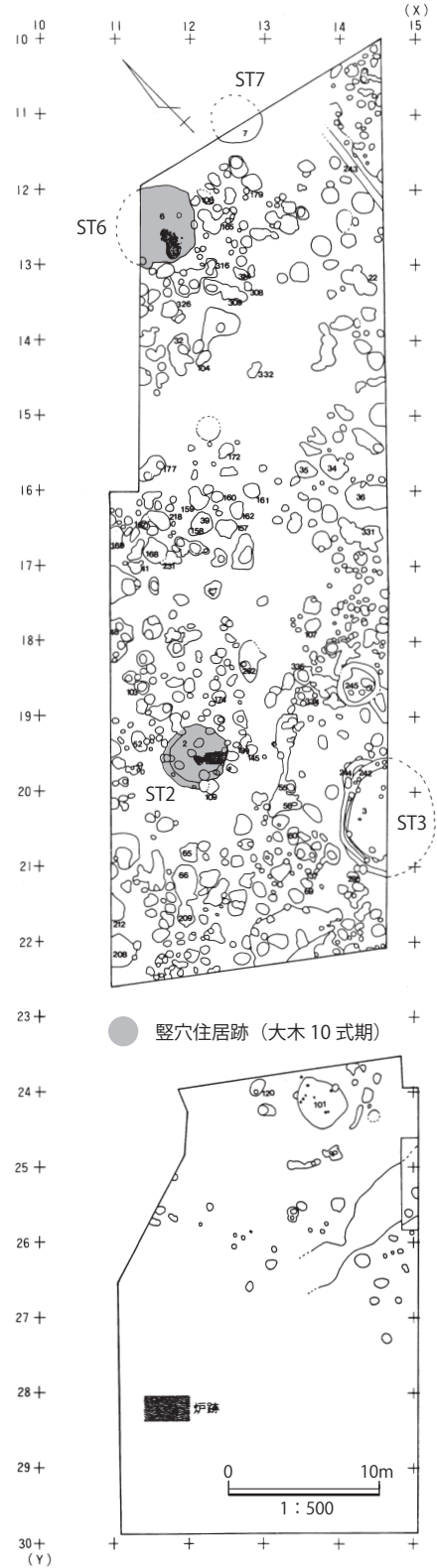


図3 岡ノ台遺跡遺構配置図

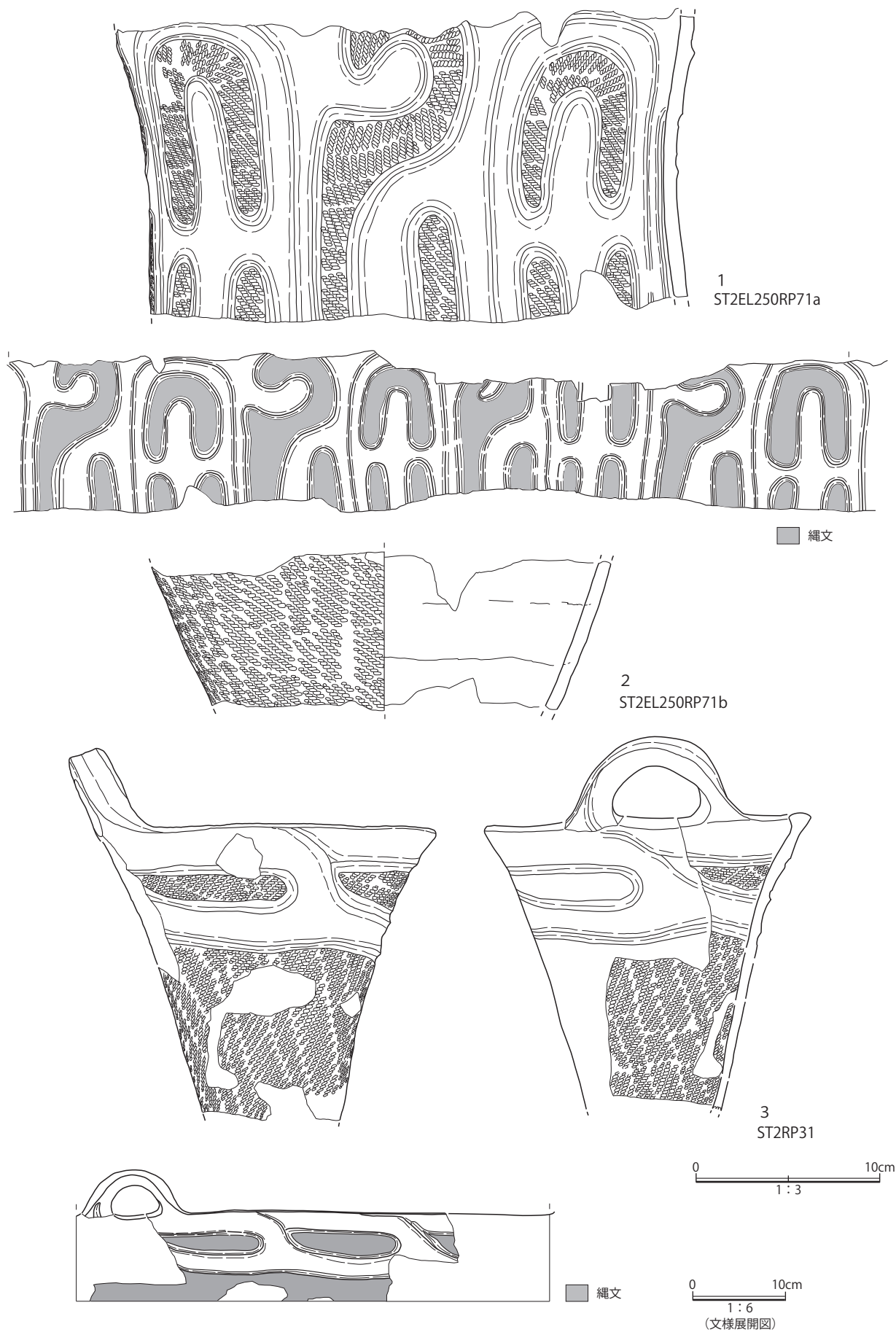


図4 岡ノ台遺跡 ST2 出土土器

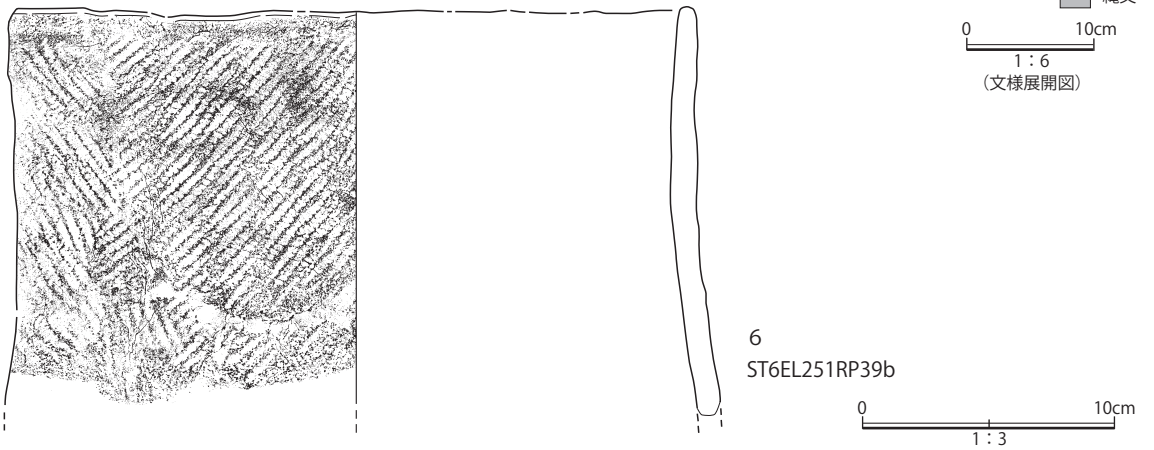
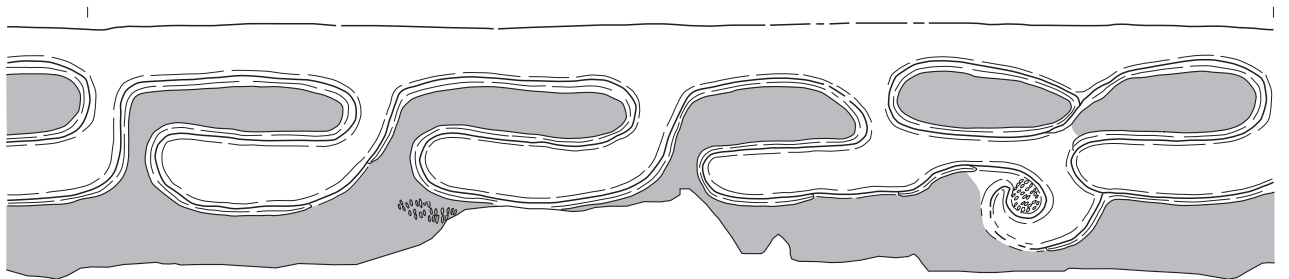
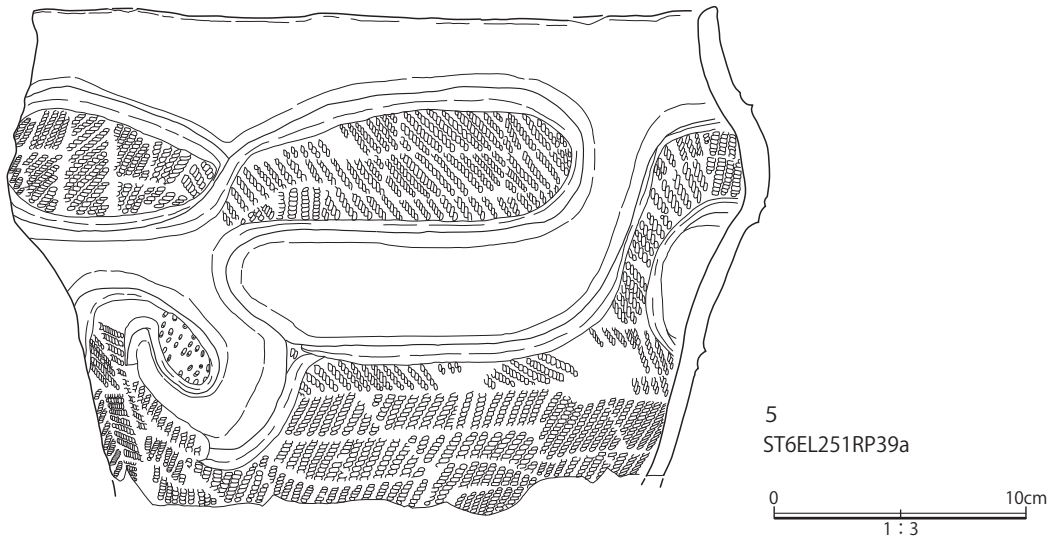
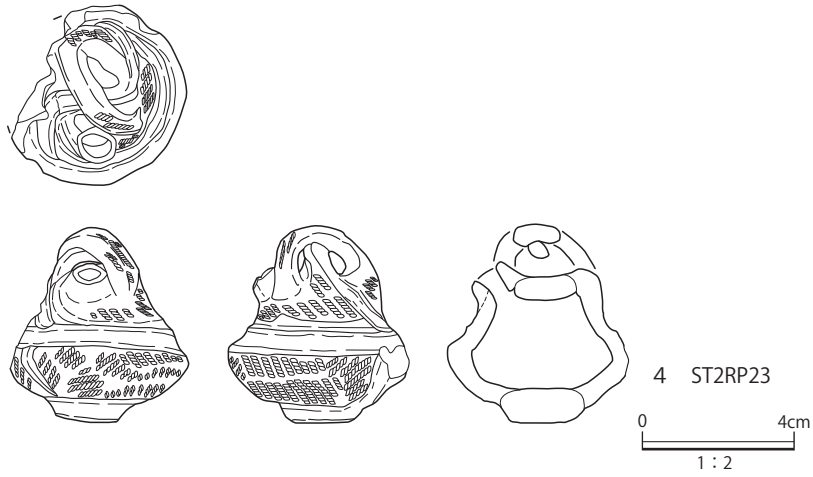


図5 岡ノ台遺跡 ST 2・6 出土土器

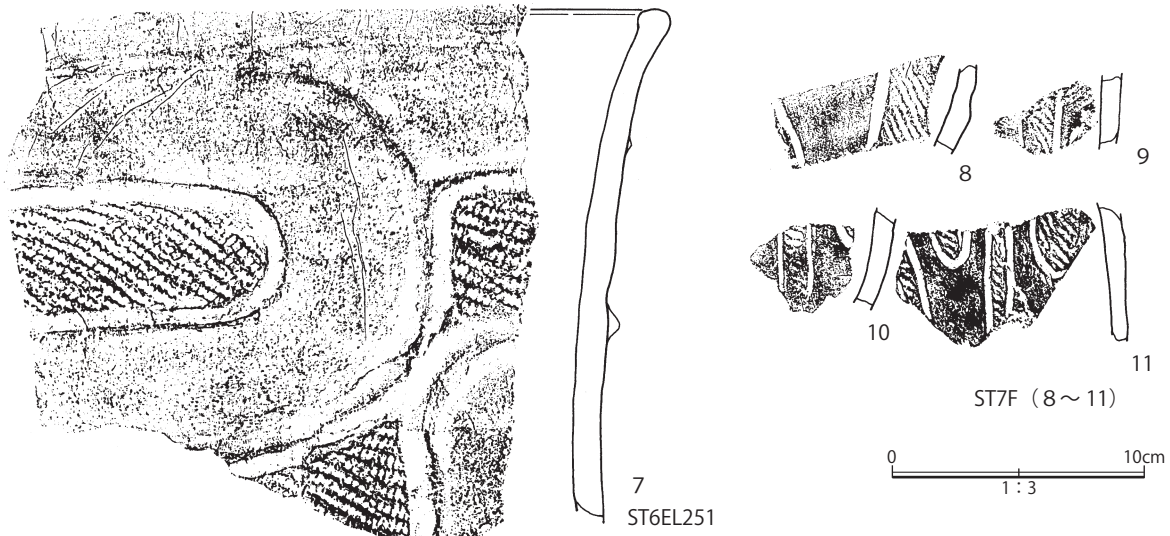


図6 岡ノ台遺跡 ST 6・7 出土土器

表 1 岡ノ台遺跡縄文土器観察表

[] は残存値、() は復元値を示す。

番号	出土地点	器種	型式	計測値 (mm)			文様・備考
				口径	器高	底径	
1	ST2EL250	深鉢	大木 10 式古段階	最大径 [314]	[169]		稜線状の隆帯による波状文、隆沈線による S 字状、U 字状文。LR 縄文。口縁、体部下半を欠く。
2	ST2EL250	深鉢	大木 10 式	最大径 [250]	[86]		LR 縄文、輪積み痕、体部中央のみ残存
3	ST2	深鉢	大木 10 式新段階	(186)	[202]		稜線状の隆帯・隆沈線によるコ字状の区画文、環状把手、RL 縄文
4	ST2	ミニチュア注口	大木 10 式新段階	8	52	14	稜線状の隆線による無文帯の文様、櫛掛け状の把手、LR 縄文
5	ST6EL251	深鉢	大木 10 式中段階	272	[201]		稜線状の隆帯・隆沈線による変形波頭文、RL 縄文、部分的に刺突文
6	ST6EL251	深鉢	大木 10 式	268	[162]		RL 縄文
7	ST6EL251-F	深鉢	大木 10 式新段階				稜線状の隆帯・隆沈線に区画された無文帯による S 字状文、LR 縄文充填
8	ST7-F	深鉢	大木 9 式新段階～10 式古段階				沈線による楕円形状区画文、L 縄文を充填、9～11 は同一個体
9	ST7-F	深鉢	大木 9 式新段階～10 式古段階				沈線による楕円形状区画文、L 縄文を充填
10	ST7-F	深鉢	大木 9 式新段階～10 式古段階				沈線による楕円形状区画文、L 縄文を充填
11	ST7-F	深鉢	大木 9 式新段階～10 式古段階				沈線によるステッキ状区画文、L 縄文を充填

晩期と思われる土器片も出土している。当住居跡が中期に帰属するのは不明である。

報告書では、中期前葉の大木 7 b 式と考えられる土器も掲載されている²⁾(名和・渡辺 1994)。中期末では、大木 9 式新段階～大木 10 式古・中・新段階の土器が確認された。調査区内で確認された大木 10 式期の竪穴住居跡は 2 棟のみであるが、遺跡の西側や北の思川に沿った段丘縁辺には、この時期の住居跡が複数棟存在する可能性が想定される。

5 周囲の遺跡との関係

周囲の遺跡との関連を検討したい。

白鷹町石那田遺跡(26)は、当遺跡の北東約 2 km に位置している(図 8)。山形大学による昭和 27・28 年の調査で、住居跡に伴うと考えられる縄文中期中葉頃の炉跡 2 基などの遺構が確認されている(柏倉 1954・白

鷹町)。大木 8a・8b・9 式期の遺跡である。また、大木 8a～8b 式期と考えられる土偶も出土しており、ある程度の規模をもつ集落の存在が想定される。

岡ノ台遺跡内では、調査区内で大木 8b 式期～大木 9 式前半にかけての遺物は確認されていない。この時期は距離的に近い石那田遺跡が主な居住地として利用されていた可能性がある。また、思川沿いには遺跡は確認されていないが、南側約 1.1～3km の近い山地に、中期後葉・末葉を中心とした遺跡の分布が認められる。八ヶ森遺跡(21)、金池遺跡(23)、金池入遺跡(24)である。馬冷場遺跡(22)は後続する後期前葉の時期である。これらの遺跡では、岡ノ台遺跡に関連をもつ集落の存在が想定される。

6 長井盆地の集落の様相

ここでは、長井盆地内の縄文中期から後期前葉にかけ

ての主な遺跡・集落跡とその変遷、関連について見ていきい。長井盆地の当時期の主な縄文時代遺跡について表2、位置を図8に示した。

長井盆地は山形県南部に位置し、米沢盆地の北西に位置する。南北約20km、東西約4～5kmの細長い形状で、盆地中央を最上川が北流する。盆地南部は飯豊山地

を水源とする白川が最上川に合流する。盆地の西部は標高1,000mを超える朝日山地が南北に連なり、この山地を源流とする野川や草岡川などの河川が東流し最上川に合流する。盆地の東側は標高300～600mの丘陵地に接している。盆地北側の荒砥、鮎貝地区では鷹戸屋山地と朝日山地が接する(阿子島2020)。

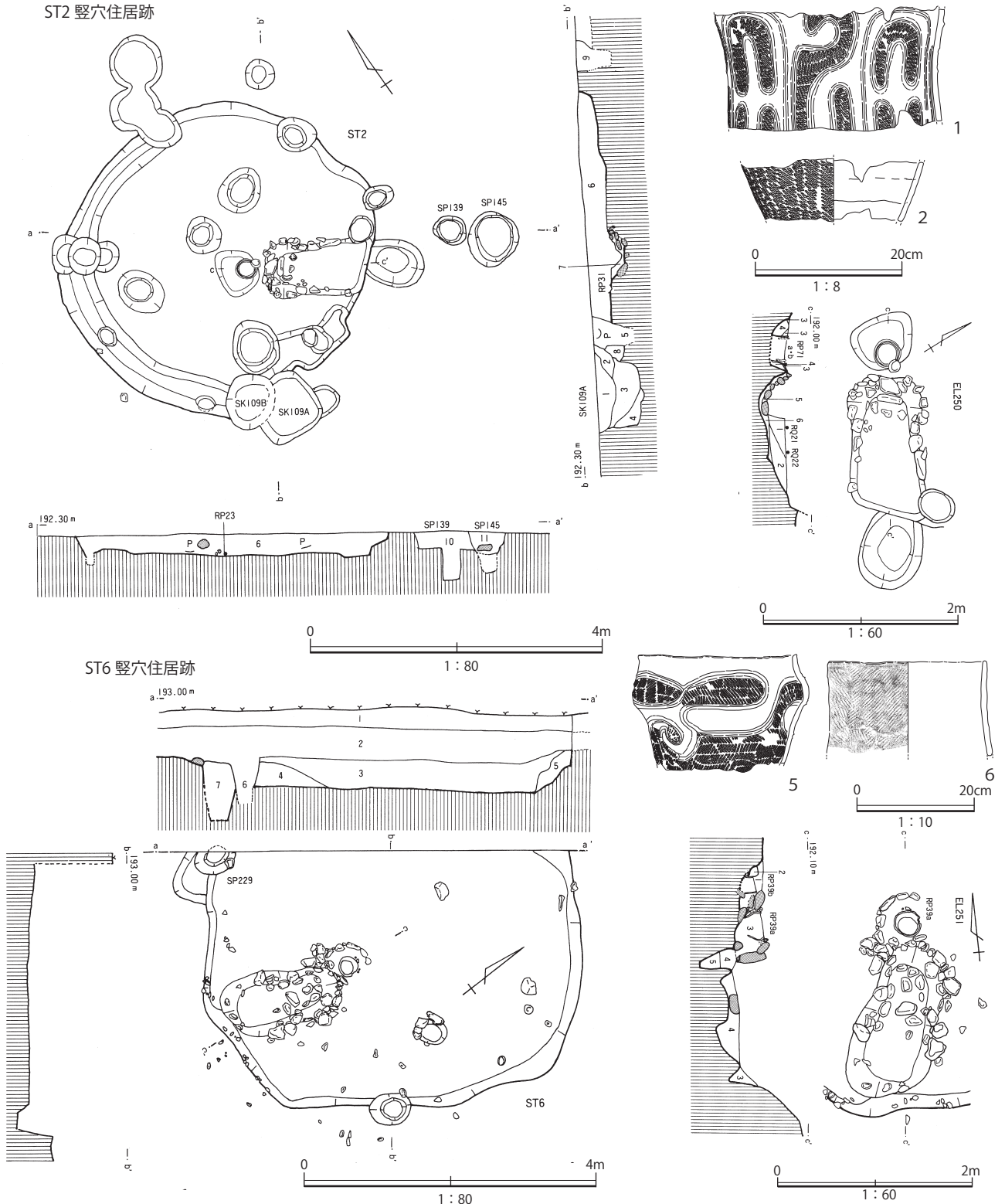


図7 岡ノ台遺跡 ST2・ST6 竪穴住居跡



図 8 長井盆地の縄文時代中期から後期前葉の主な遺跡

表 2-1 長井盆地の縄文時代中期～後期前葉の遺跡リスト

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高(m)	河川	中期										後期		文献
							7a	7b	8a	8b	9	10	初頭	南1	南2				
1	402-193	岩穴	長井市上伊佐沢字岩穴	小起伏山地	260	逆川	○												県遺跡台帳
2	209-213	久保	長井市大字上伊佐沢字久保	小起伏山地	240	逆川				○	○	○							長井市 29 集
3	209-125	壇の越	長井市上伊佐沢字善並	自然堤防	250	水無川					○	○						県遺跡台帳	
4	209-061	座須脇	長井市成田字塔ノ下	小起伏山地	260	逆川				◎	◎							長井市 10・25 集	
5	209-038	館之越	長井市大字泉字館之越	自然堤防	208	福田川	○	○	◎	○								県遺跡台帳 県分布 13・14 長井市 8・19 集	
6	209-040	小山	長井市九野本字小山	谷底平野	205	最上川										-	-	山埋文 104 集	
7	209-078	谷地寺	長井市九野本字長野	河間低地	212	最上川						○	○	○	○			長井市 26・27 集	
8	209-069	南台	長井市九野本字長野	河間低地	205	最上川						-	-					長井市 28 集	
9	209-194	小桜館	長井市高野町・十日町・新町・大町地内	河間低地	200	野川・最上川		○	○									長井市 29 集	
10	209-188	宮	長井市宮十日町	河間低地	200	野川	○	●	●	○								県史考古資料・県遺跡台帳 長井市 22・25・26・28 集	
11	209-221	空沢	長井市寺泉字空沢西・入野川向	段丘Ⅲ	268～272	野川			◎	◎		●	◎	◎	◎			センター 144 集	
12	209-190	大沢第 2	長井市寺泉字上郷 4493	山地・丘陵地(中・急斜面)	260	野川						○						県遺跡台帳	
13	209-164	黒附	長井市川原沢字黒附	段丘Ⅲ	240	水無川		◎	-	-	○	◎						県遺跡台帳・長井市 31 集・32 集	
14	209-168	飯沢北館跡	長井市大字成田字北館	河間低地	199	野川								◎				県分布 25	
15	209-130	長者原	長井市大字草岡字長者原	段丘Ⅲ	280	北の沢川					◎	○						長井市 14 集・県遺跡台帳	
16	209-127	長者屋敷	長井市大字草岡字長者屋敷	段丘Ⅲ	269							○	●					長井市教委 1979・1980・1981 長井市 15・16・18・33 集	
17	209-133	中里 B	長井市草岡字中里	段丘Ⅲ	240	久川						○	○	○	○			長井市 30 集	
18		問答山	長井市勸進代字草岡	扇状地	240	草岡川?						○	●					長井市 20・24・25 集	
19	209-029	唐梅	長井市勸進平字唐梅・飯沢	扇状地	240						○	◎	◎	◎	◎	○		長井市 1983・長井市史第 1 巻 長井市 11・30・31 集	
20	209-068	蔵京 B	長井市勸進平字蔵京	段丘Ⅱ	276	(最上川)				○	○							県史考古資料・県遺跡台帳	
21	402-046	八ヶ森	白鷹町大字浅立字八ヶ森 4225	小起伏山地	340	(最上川)							○					県史考古資料	
22	402-041	馬冷場	白鷹町大字浅立字馬冷場	小起伏山地	250	最上川										○		県史考古資料	
23	402-021	金池	白鷹町大字畔藤字田中	扇状地	200	最上川								○				白鷹町史上巻	
24	402-020	金池入	白鷹町大字畔藤字金池入	小起伏山地	200	最上川						-	-					白鷹町史上巻	
25	402-077	岡ノ台	白鷹町大字畔藤字岡ノ台	自然堤防	189～193	最上川	○	○	○				●			○		山埋文 15 集	
26	402-116	石那田	白鷹町大字荒砥甲字南上野 371	小起伏山地	240	貝生川				○	○	○						荒砥町誌・白鷹町史上巻	
27	402-023	菖蒲中屋敷	白鷹町大字菖蒲字中屋敷 1303	段丘Ⅲ	200	最上川				-	-	○						白鷹町史上巻	
28	402-099	関寺	白鷹町大字十王字関寺 3899	扇状地	240	荒砥川				-	-	○						白鷹町史上巻	
29	402-016	中十王 1	白鷹町大字十王字中十王 4614	扇状地	260	米沢川		○				○						白鷹町史上巻	
30	402-044	花在家	白鷹町大字十王字花在家	扇状地	260	荒砥川					○	○						県遺跡台帳・白鷹町史上巻	
31	402-118	大豆田下	白鷹町大字十王字大豆田下 5200	扇状地	240	荒砥川				-	-							県遺跡台帳・県分布 15	
32	402-040	玉井	白鷹町大字十王字愛宕坂東 5976	崩積緩斜面及び地滑り滑動地塊	320	萩野川				-	-	○	○					白鷹町史上巻	
33	402-085	原川	白鷹町大字萩野字原川 3198	扇状地	320	萩野川				-	-	○						白鷹町史上巻	
34	402-051	萩野沢	白鷹町大字萩野 3246	扇状地	480	萩野川				-	-							県遺跡台帳	
35	402-054	村松	白鷹町大字滝野字村松 3267	山頂・山腹緩斜面	460	萩野川				-	-							白鷹町史上巻	
36	402-094	生野原	白鷹町大字横田尻字東生野原	扇状地	200	(最上川)							○					白鷹町史上巻	
37	402-098	中町西	白鷹町大字横田尻字中町西 1323	段丘Ⅲ	200	(最上川)				-	-	○	○		○	◎		白鷹町史上巻 白鷹町 1 集 白鷹町 2 集	
38	402-117	蚕桑高田	白鷹町大字横田尻字高田	段丘Ⅲ	240	(最上川)						○						県遺跡台帳・白鷹町史上巻	
39	402-096	十二堂	白鷹町大字横田尻字十二堂	扇状地	280	(最上川)				-	-	○	○					白鷹町史上巻	
40	402-106	蚕桑高野	白鷹町大字横田尻字中道端 5503	丘陵地	230	(最上川)				-	-	○						白鷹町史上巻	
41	402-121	八幡台 1	白鷹町大字鮎貝字八幡台	段丘Ⅲ	220	八幡川	○			-	○	○	○					県遺跡台帳・県史考古資料	
42	402-010	八幡 2	白鷹町大字鮎貝字八幡 3・1221 他	段丘Ⅲ	200～210	最上川								○				県分布 20	
43	402-015	鮎貝八幡 1	白鷹町大字鮎貝字八幡 7-155	段丘Ⅲ	220	八幡川										-	-	県史考古資料	
44	402-032	蚕桑畑中	白鷹町大字山口字畑中道下	段丘Ⅲ	210	八幡川								○				白鷹町史上巻	
45	402-039	横田尻白ヶ沢	白鷹町大字横田尻字白ヶ沢	小起伏山地	300	白ヶ沢							○	○				県遺跡台帳・白鷹町史上巻	
46	402-036	蚕桑山神	白鷹町大字山口字南沢	扇状地	320	八幡川								○				白鷹町史上巻	
47	402-047	深山西向 1	白鷹町大字深山西向	段丘Ⅲ	260	実淵川							○	○				白鷹町史上巻	
48	402-034	小四王原 A	白鷹町大字高岡外ノ王山 279	段丘Ⅲ	180	実淵川						○	○	○	●		-	白鷹町史上巻	

表 2-2 長井盆地の縄文時代中期～後期前葉の遺跡リスト

番号	県登録番号	遺跡名	所在地	地形	標高(m)	河川	中期						後期		文献		
							7a	7b	8a	8b	9	10	初頭	南1 南2			
49	403-070	剗堂	飯豊町大字中剗堂 1996	山地・丘陵地 (中・急斜面)	270	尻無沢						○					県遺跡台帳
50	403-050	柳沢 A	飯豊町大字萩生柳沢 3083	段丘 II	250	萩生川		-	-								県遺跡台帳
51	403-067	石箱	飯豊町大字萩生石箱道下	扇状地	249	萩生川							◎	○	○		飯豊町教委 1980
52	403-008	郡之神	飯豊町大字椿字郡之神 2595-1	扇状地	243	白川						◎	◎	◎	◎		県 23・191 集
53	403-048	下野	飯豊町大字小白川下野 52	扇状地	240	白川						○					県遺跡台帳
54	403-002	契約壇	飯豊町大字小白川下野 3350	扇状地	245	白川						○					県遺跡台帳
55	403-014	町下	飯豊町大字松原字町下 570、572、577、580	段丘 (III)	220	白川								◎	◎		県 57 集
56	403-058	裏山 I	飯豊町大字椿 2888	段丘 (III)	225	白川							○	◎			飯豊町 9 集
57	403-062	赤岩	飯豊町大字高崎字赤岩 3976・3977	山地・丘陵地 (山麓緩斜面)	275	白川	◎	◎	◎								県分布 (15)・県 155 集

遺跡一覧表の時期の表記であるが、「○」は報告書などでその時期に比定される事を表す。「◎」は、その時期の遺構が存在することを表す。「●」はその時期に住居跡が検出されていることを表す。「-」は細別型式が不詳であることを示す。例えば、中期前葉に比定されるが型式が不詳である際は、7a・7b 式の欄に「-」を入れている。また表の作成にあたり、引用・参考とした報告書や文献については、紙面の制約もあり「文献」の欄に略記した。



図 9 長井市宮遺跡調査区配置図

縄文中期を中心とする遺跡分布は、これらの河川の流域沿いや、盆地から山地・丘陵地の縁辺沿いに分布が多く認められる (図 8)。

(1) 中期前葉 (大木 7a・7b 式期) の遺跡

大木 7a 式期では、盆地南端の白川上流に位置する赤岩遺跡 (57)、盆地南部の最上川に近い館之越遺跡 (5)、盆地中央の野川と最上川の合流域に近い宮遺跡 (10)、

盆地北部の最上川右岸に岡ノ台遺跡 (25)、左岸に八幡台 1 遺跡 (41) などがあるが、集落の内容はよくわかっていない。

大木 7b 式期では赤岩遺跡、館之越遺跡、宮遺跡は存続する。盆地西側には黒附遺跡 (13) が、盆地北では中十王 1 遺跡 (29) がある。岡ノ台遺跡は遺物の出土が確認されている。この時期の発掘で集落の内容が比較

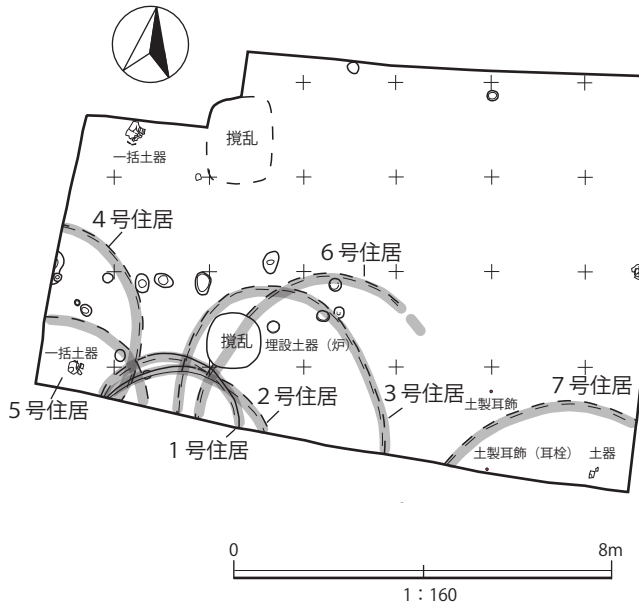


図10 宮遺跡第2次調査区I区遺構平面図 (1:160)

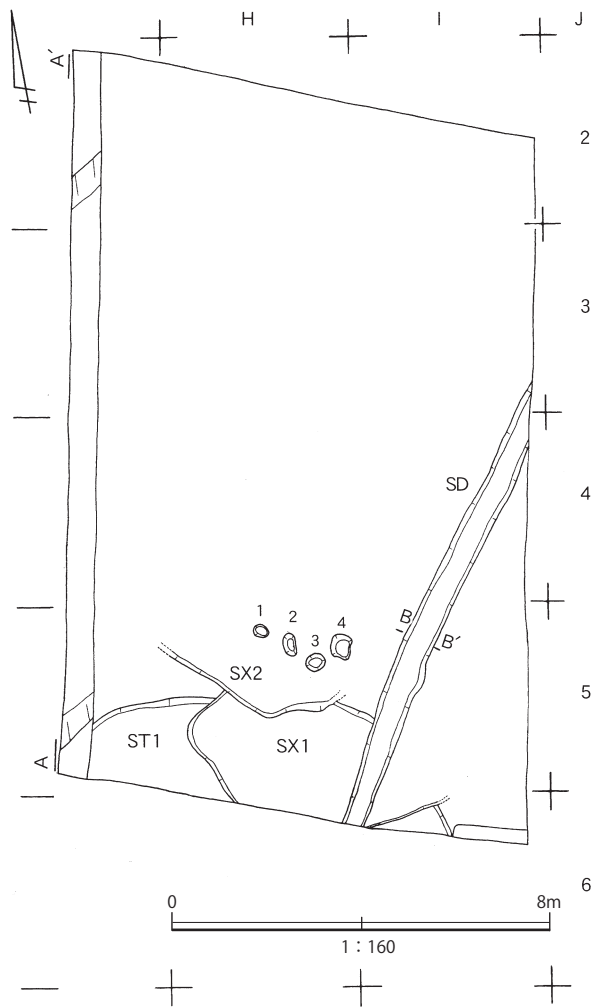


図12 宮遺跡第4次調査区遺構平面図

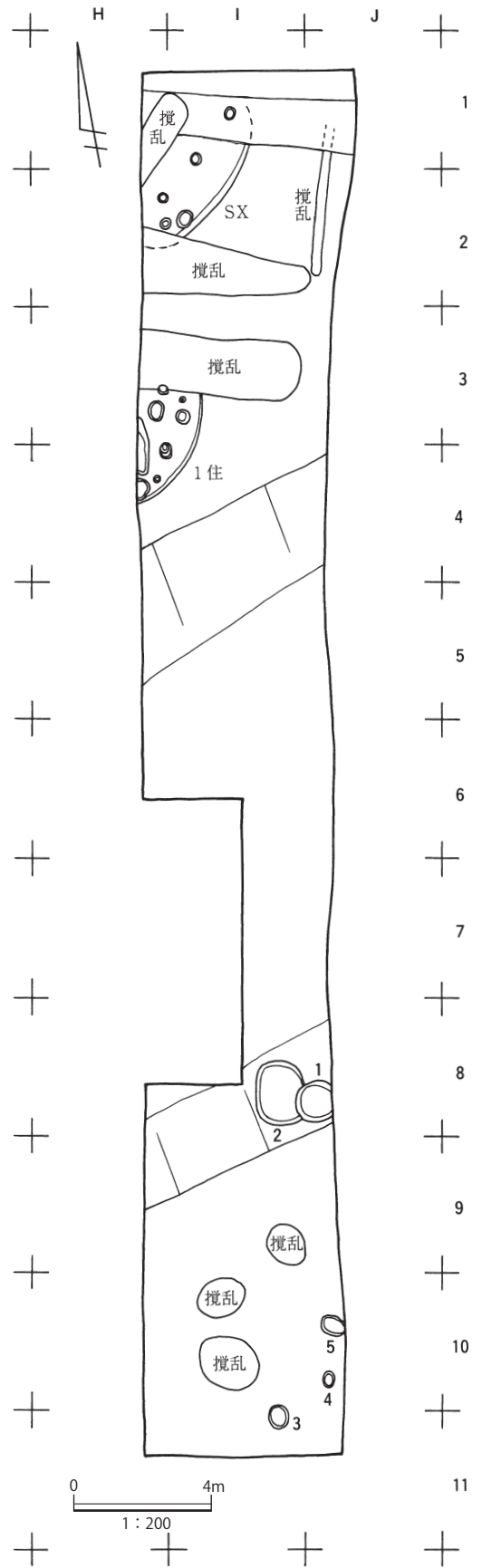
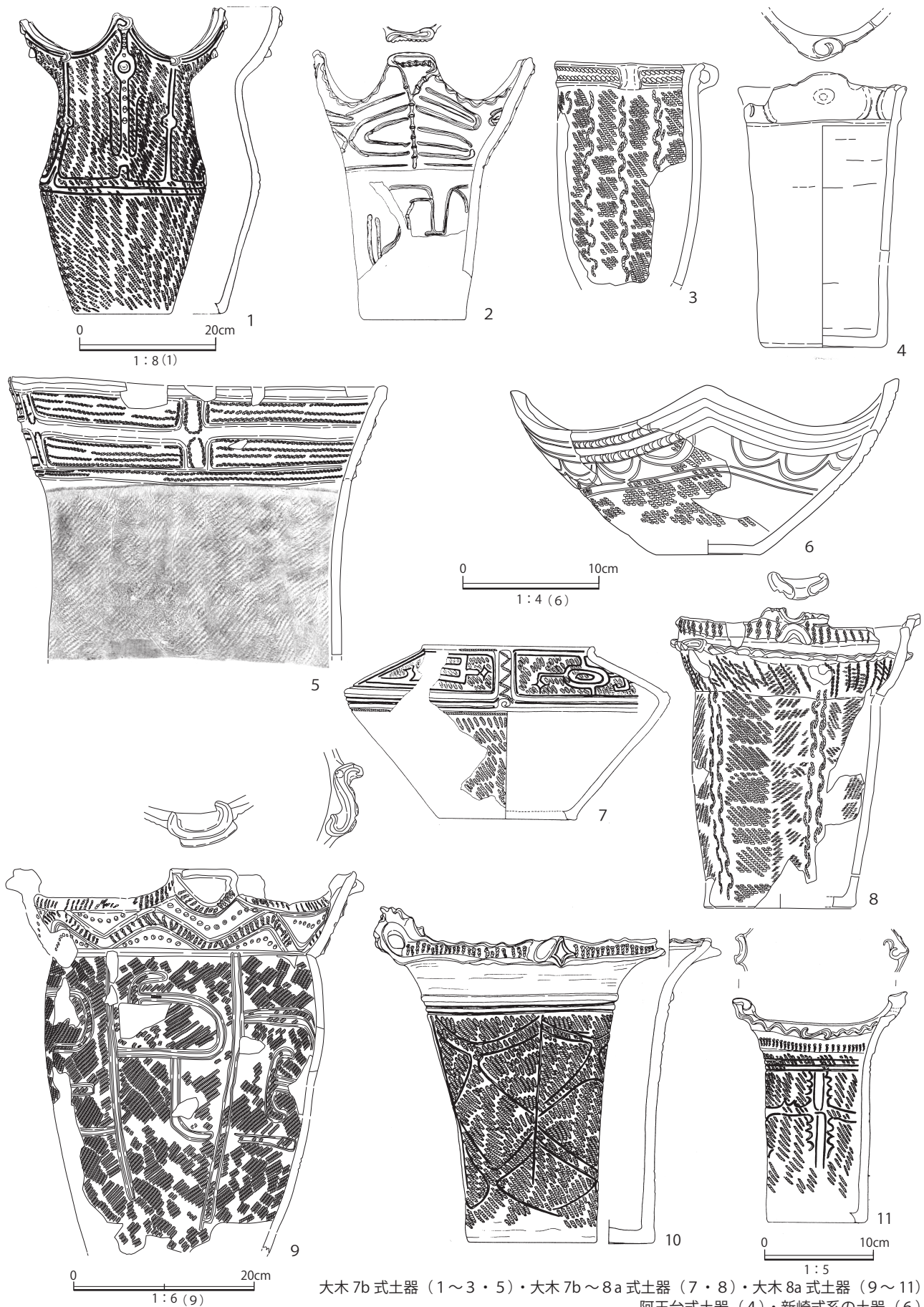
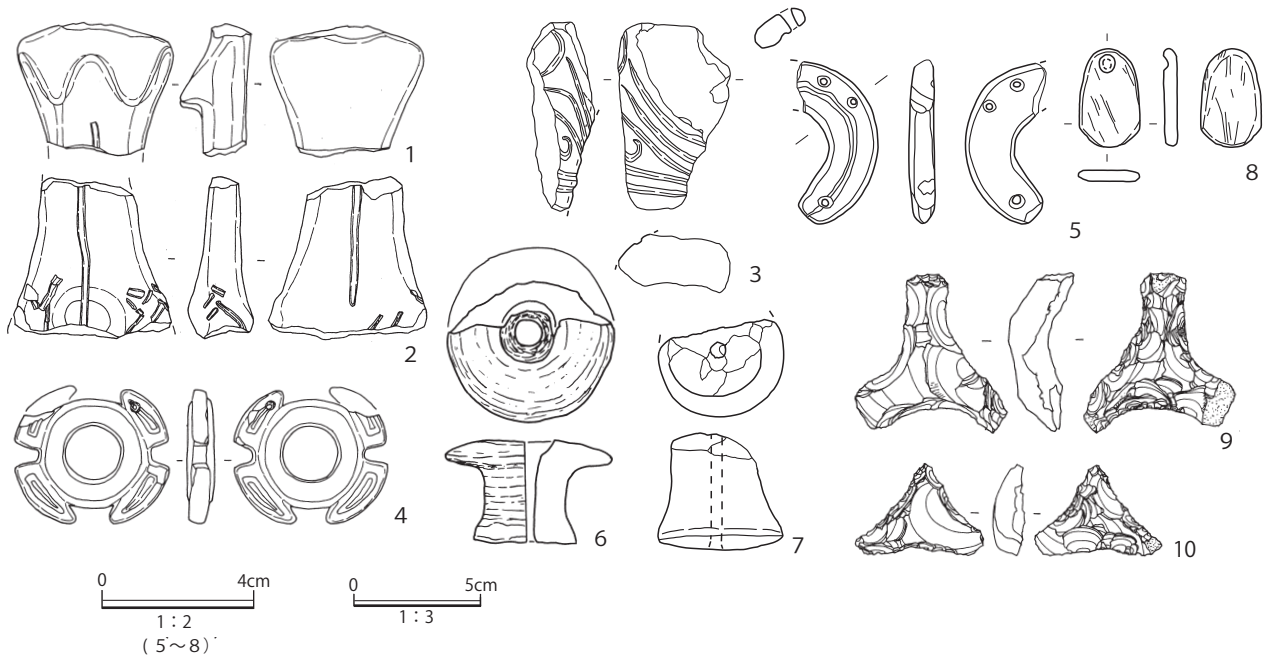


図11 宮遺跡第3次調査区遺構平面図



大木 7b 式土器 (1~3・5)・大木 7b~8a 式土器 (7・8)・大木 8a 式土器 (9~11)
阿玉台式土器 (4)・新崎式系の土器 (6)

図 13 長井市宮遺跡出土の中期前葉・中葉の縄文土器



土偶 (1~3)・石製垂飾品 (4)・土製耳飾 (5~7)・石製品 (未製品) (8)・三脚石器 (9・10)

図14 宮遺跡出土の土偶・土製品・石製品

的明らかになっているのは宮遺跡である。内容については後述するが、宮遺跡ではこの時期以降安定した集落が形成されたと考えられる。

(2) 中期中葉 (大木 8a・8b 式期) の遺跡

長井盆地の南部・中央部については、あまり遺跡数の変化は見られないが、北部については確認されている遺跡数が大きく増加している。

白川流域には、上流に赤岩遺跡 (57)、契約壇遺跡 (54) など大木 8a 式期の遺跡がある。盆地南部の館之越遺跡 (5) では、長井市文化財調査会による発掘で、十数基の貯蔵穴と考えられる土坑が確認されており (佐藤 1984)、大木 7a~8a 式土器が大量に出土している。宮遺跡は大木 7b~8a 式期を中心とした集落跡と考えられ、竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑などが確認されている (岩崎 2003・2005・2006 ほか)。盆地中央の西側段丘沿いには、空沢遺跡 (11)、黒附遺跡 (13)、唐梅遺跡 (19)、蔵京 B 遺跡 (20) などがある。空沢遺跡では土坑やピット群が検出され、馬高式土器が出土している (水戸部ほか 2005・山形県教委 2008)。盆地北端部では、最上川両岸の段丘上や丘陵地沿いに遺跡の分布が多い。主な遺跡として、実淵川と最上川合流地点に近い小四王原 A 遺跡 (48) がある。石那田遺跡 (26) では、大木 8b 式期から 9 式期と考えられる炉跡や遺物が出土している (白鷹町 1977)。

(3) 中期前葉・中葉の集落跡・長井市宮遺跡

長井盆地内の中期前葉から中葉にかけての主な集落跡である宮遺跡の様相について述べたい。

宮遺跡は、長井市十日町に位置する。現況は市街地となっている。最上川と野川によって形成された河間低地上に立地し、標高は 200 m である。東西約 250 m、南北約 300 m の広がりをもつ大規模な遺跡である。長井市教育委員会による 5 次にわたる発掘調査が行われている (図 9)。

昭和 31 年 (1956) の第一次調査は、十日町郵便局南側の道路でトレンチ状の調査区 (A~E 区) を設定し行われた。土器埋設炉を備える 1 号住居跡、直径約 4 m で 2 基の炉跡を備える 2 号住居跡、周溝だけの 3 号住居跡、炉跡 1 基が検出された (佐藤 1984)。出土土器は大木 7b~8a 式土器であり、遺構もこの時期に帰属すると思われる。

その後、遺跡内に十日町郵便局が移転・新築されるのに伴い第 2 次調査が行われた (長井市教委 1987)。I 区約 320 m²、II 区約 180 m² の調査区で (図 10)、IV 層が遺物包含層となり、検出面は地表から 0.9~1.05 m である。遺構は I 区から主に検出され、住居跡 7 棟、炉跡 2 基、ピット、土坑が確認された。住居跡は密集して分布し重複が多い (図 10)。1~6 号住居跡は重複するが、1 号住居跡が最も古い。2 号住居跡は 1 号住居跡の

建て替えであり、また、3号住居跡と6号住居跡の新旧は不明であるが、連続して建て替えが行われたと推定される。平面形は円形や楕円形で、3～6m程の規模になると思われる。5号住居跡は土器片敷きの炉跡、3号住居跡は土器埋設炉を備える。7号住居跡とその付近から土製耳飾りが2点出土している(図14-5・7)。

第3次調査では、南北方向にトレンチ状の調査区が設けられた。大木7b～8a式期の竪穴住居跡1棟、楕円形状の性格不明遺構、土坑などが確認された(図11)(岩崎2003)。第4次調査では、竪穴遺構1基、性格不明遺構2基など(図12)、第5次調査では土坑などが検出された(岩崎2006・2008)。

調査範囲が限られているため、集落の全体の様相を推定するのは難しいが、1・2次調査区と周辺は住居跡の分布が多く、3次調査区の北側や4次調査区の南側に遺構の分布が多いことから、これらの調査区の間が集落の広場などを有する中心域と推定される。

宮遺跡では、主として大木7b式から大木8a式にかけての土器が出土している(図13)。大木7b式土器は、四単位の大波状口縁で、区画内に沈線による文様が施される深鉢や(図13-1・2)、平縁の深鉢で押圧縄文による文様が施されるもの(図13-3・5)が認められる。図13-7・8は、大木7b式から8a式にかけての時期と思われる。7は浅鉢で口縁部がくの字状に屈曲し、円文や曲折文を組み合わせた文様や押圧縄文が見られる。8は深鉢でキャリパー形の口縁部を、押圧して波状になった隆帯で上下に区画し、縦に連続した押圧縄文を施す。口縁部にはC字状の隆帯の貼り付け、体部には綾絡文が見られる。図13-9～11は大木8a式土器で、古い段階に位置づけられるものと思われる。9・10は口縁部に縦の押圧縄文が連続して認められる。9の体部にはクランク文、10には三角形や菱形状の意匠が描かれている。その他、新崎式など北陸系の土器やその影響を受けたと思われる土器(図13-6)が伴う。東関東の阿玉台式の影響を受けたと思われる土器(図13-4)も出土するが稀である。新崎式土器や阿玉台式土器は、米沢盆地の台ノ上遺跡でも出土が確認されている(菊池2006)。

土偶は3点が報告されている(図14-1～3)。西ノ前型式の土偶と考えられ、大木7b～8a式期に伴う

ものと推測される。石棒も出土が報告されている。その他、三脚石器が出土している(図14-9・10)。米沢盆地を中心として出土が多い遺物であり、当遺跡も影響を受けていると思われる。耳飾りや石製垂飾品と考えられる遺物を図14-4～8に示した。

(4) 中期後葉・末葉(大木9・10式期)の遺跡

盆地南端には、飯豊町郡之神遺跡(52)、石箱遺跡(51)がある。石箱遺跡では住居跡(時期は不明)や大木10式期の埋設土器群が確認され、墓域をもつ集落であると考えられる(加藤1980)。この時期に盆地西側の朝日山地山麓の段丘沿いには遺跡が多く出現する。野川流域で山地に入った地点には、空沢遺跡(11)がある。大木10式期の小規模な竪穴住居跡1棟や土坑などが確認され、山間部のキャプサイトや食料採集場所としての利用が想定される(水戸部ほか2005)。盆地中央西側の朝日山地山麓には、調査によっていくつかの集落跡が明らかになっている。黒附遺跡(13)は、大木10式期の竪穴遺構などが確認されている(岩崎2011)。長者屋敷遺跡(16)は、長井市による調査で大木10式期を中心とする中期末の集落が明らかになった。詳細は後述するが、竪穴住居跡17棟、半截木柱遺構、集石遺構、土坑、埋設土器などが確認された(岩崎2000・菅原2019aほか)。問答山遺跡(18)でも大木10式期の竪穴住居跡が2棟(岩崎2004)、中里B遺跡(17)では中期末から後期初頭の配石遺構などが確認されている(岩崎2010)。

盆地北側でも遺跡の分布は多い。最上側右岸の岡ノ台遺跡(25)では大木10式期の竪穴住居跡2棟が調査された(名和・渡辺1997)。石那田遺跡(26)は、大木9式期にかけての遺構があると考えられる。盆地北端の小四王原A遺跡(48)では大木10式期の住居跡2棟が確認されている(白鷹町1977)。

(5) 中期後葉・末葉の集落跡・長井市長者屋敷遺跡

長井盆地において中期後葉・末葉の集落跡の全容が明らかになった事例として長者屋敷遺跡を取り上げる。

当遺跡は長井市大字草岡地内に所在し、長井市立西根小学校の西方約700mに位置する。朝日山地山麓から東に張り出した台地上に立地し、標高は269mである。

長井市による昭和52年の第1次調査、昭和54年の第2次調査、昭和57年の第3次調査により遺跡内容が

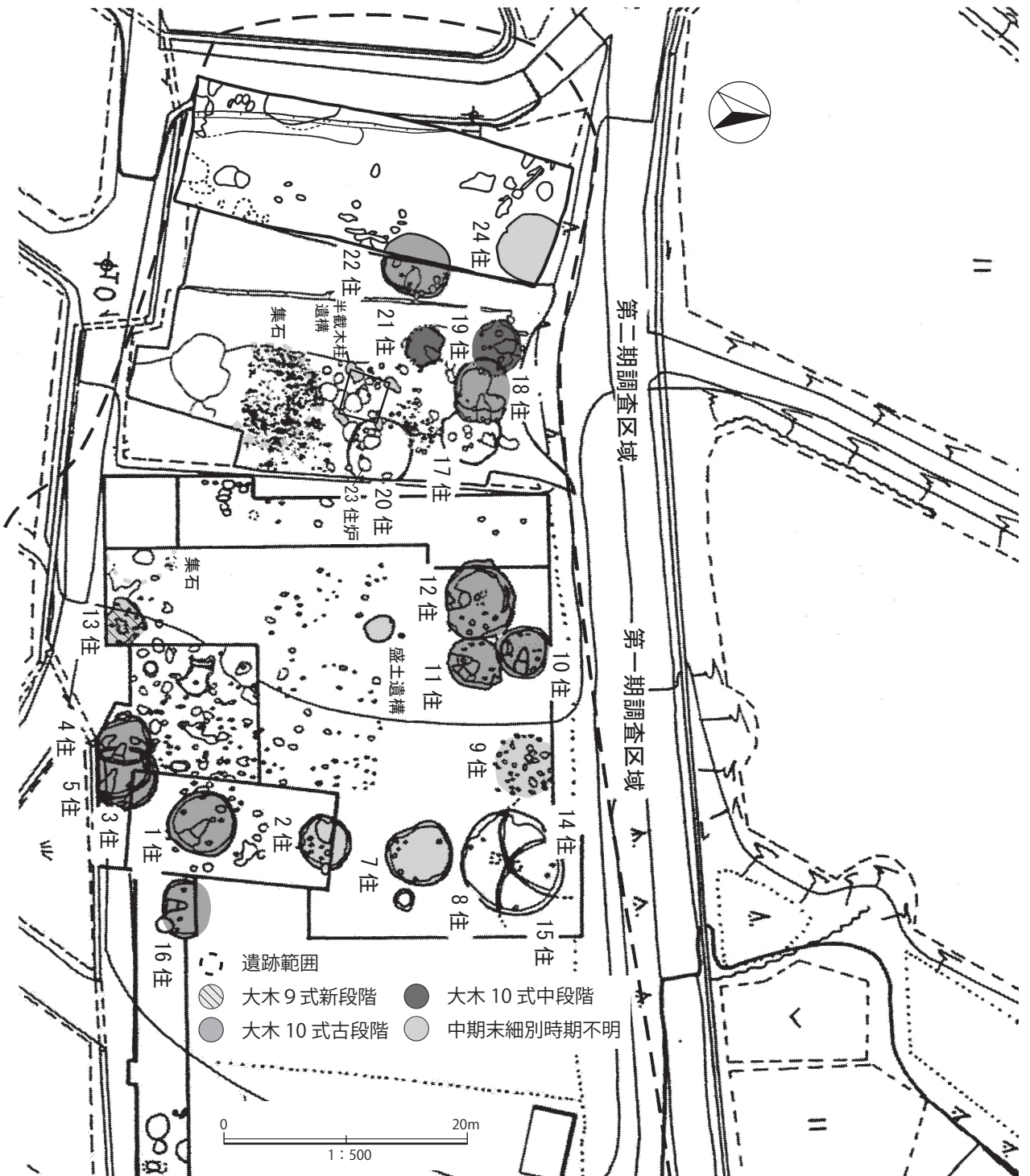


図15 長者屋敷遺跡遺構配置図

明らかにされ（長井市教委 1981）、長井市の史跡として保存された。その後も、平成8年の分布調査、平成9年の試掘調査、平成10年に範囲確認調査・試掘調査が行われている（岩崎 1998・1999・2000）。平成28年にも調査が実施された（長井市教委 2016）。

長者屋敷遺跡で検出された中期後葉・末葉の住居跡は、総数で17棟が検出されている（図15）。このうち、複

式炉が確認された住居跡は14棟である。中期の集落の開始時期は、大木9式新段階と考えられる。

細別時期による住居跡の時期と配置を述べる。大木9式新段階の住居跡は、13号住居跡の1棟である。発掘調査区の南東寄りに位置する。複式炉が設置されていたものと思われるが、炉石は抜取りされており、埋設土器は確認されていない。大木9式期の住居跡は1棟だけで

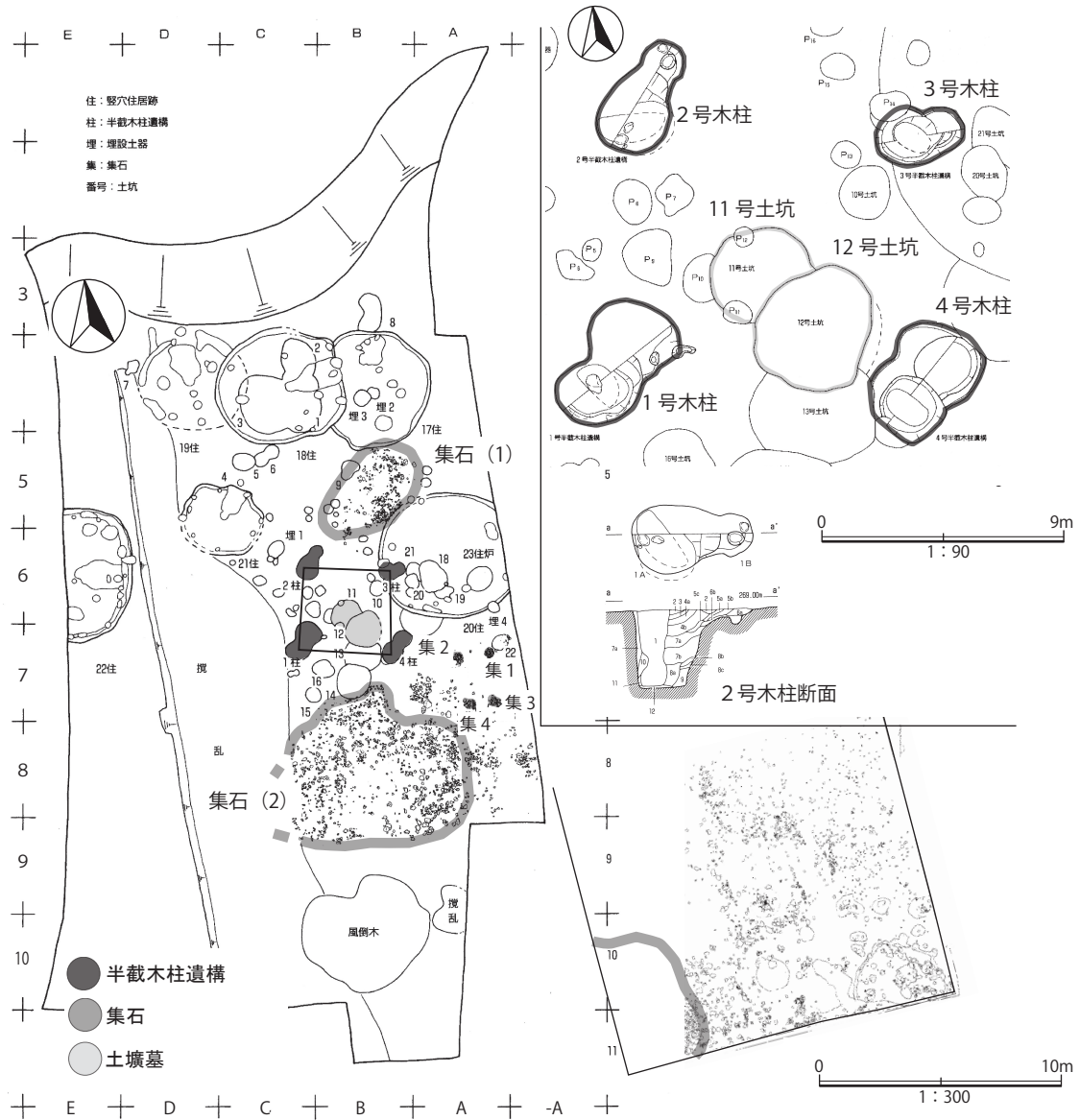


図 16 長者屋敷遺跡半截木柱遺構・集石遺構・土坑

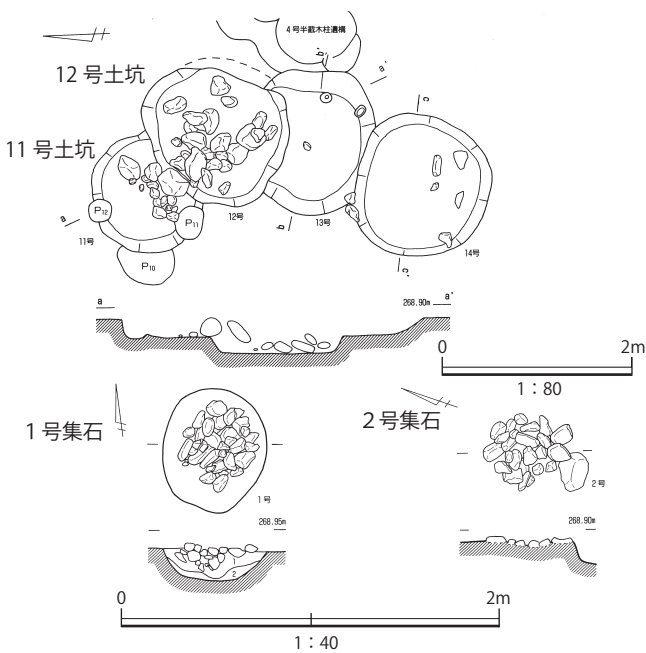


図 17 長者屋敷遺跡土坑・集石遺構

はなく、調査区外にも存在していた可能性がある。

次の大木 10 式古段階の住居跡であるが、集落内で最も棟数多く、検出棟数は 10 棟である。南東に 1・3～5・16 号住居跡がある。北側中央には、10～12 号住居跡がある。北西隅には 18・22 号住居跡がある。

南東の住居群である 3・4・5 住居跡は重複している。最初に建てられたのは 5 号住居跡で、その後拡張されたのが 3 号住居跡、建て替えられたのが 4 号住居跡である。

10・11・12 住居跡は、調査区中央の北縁部に位置し近接した位置にある。同時存在ではなく時間的な前後関係があり、同じ地点に住居が建て替えられながら続いていたものと推測される。この 3 棟について、11 号→12 号→10 号住居跡の変遷を想定されているが(佐

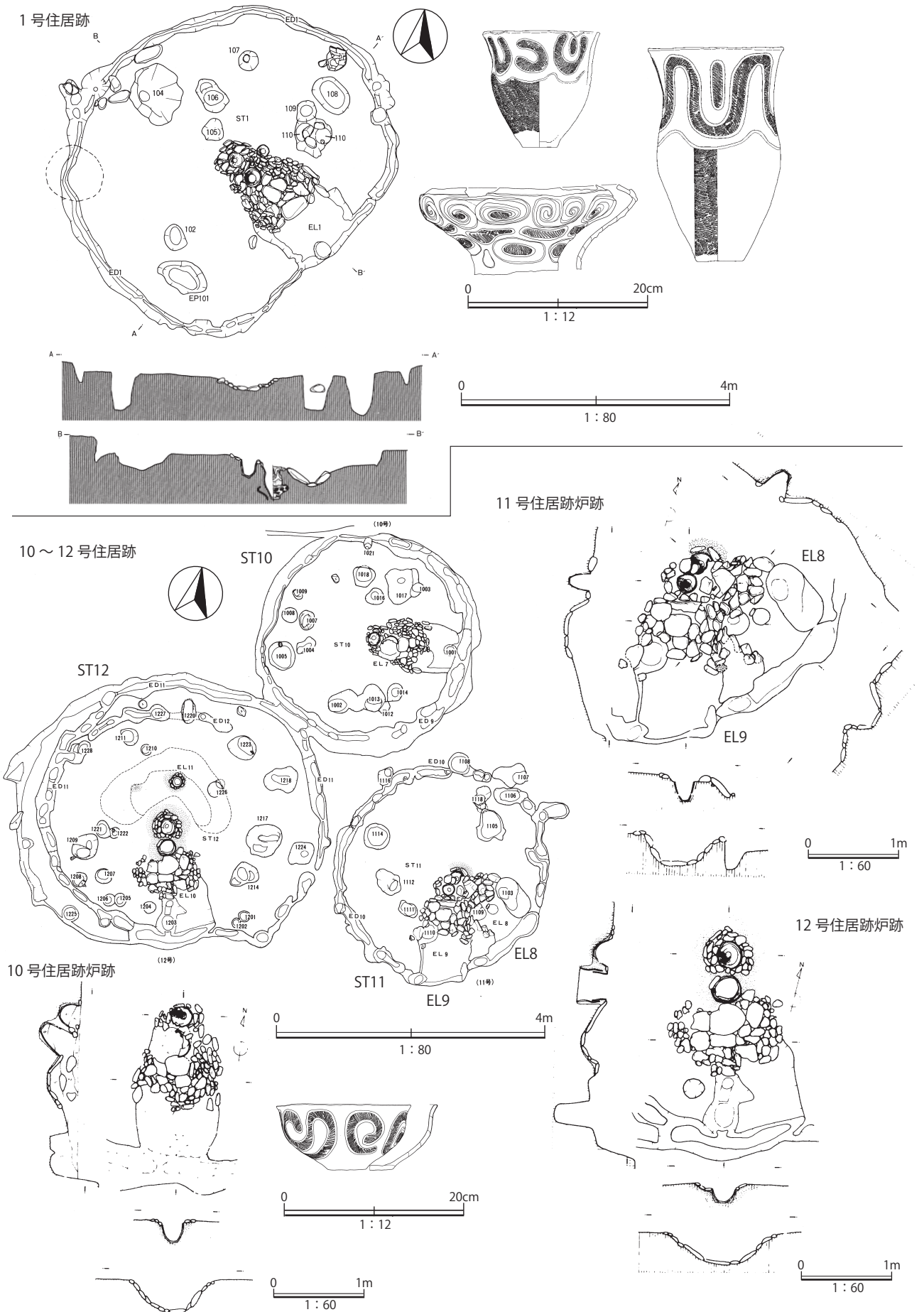


図 18 長者屋敷遺跡 1・10~12号住居跡

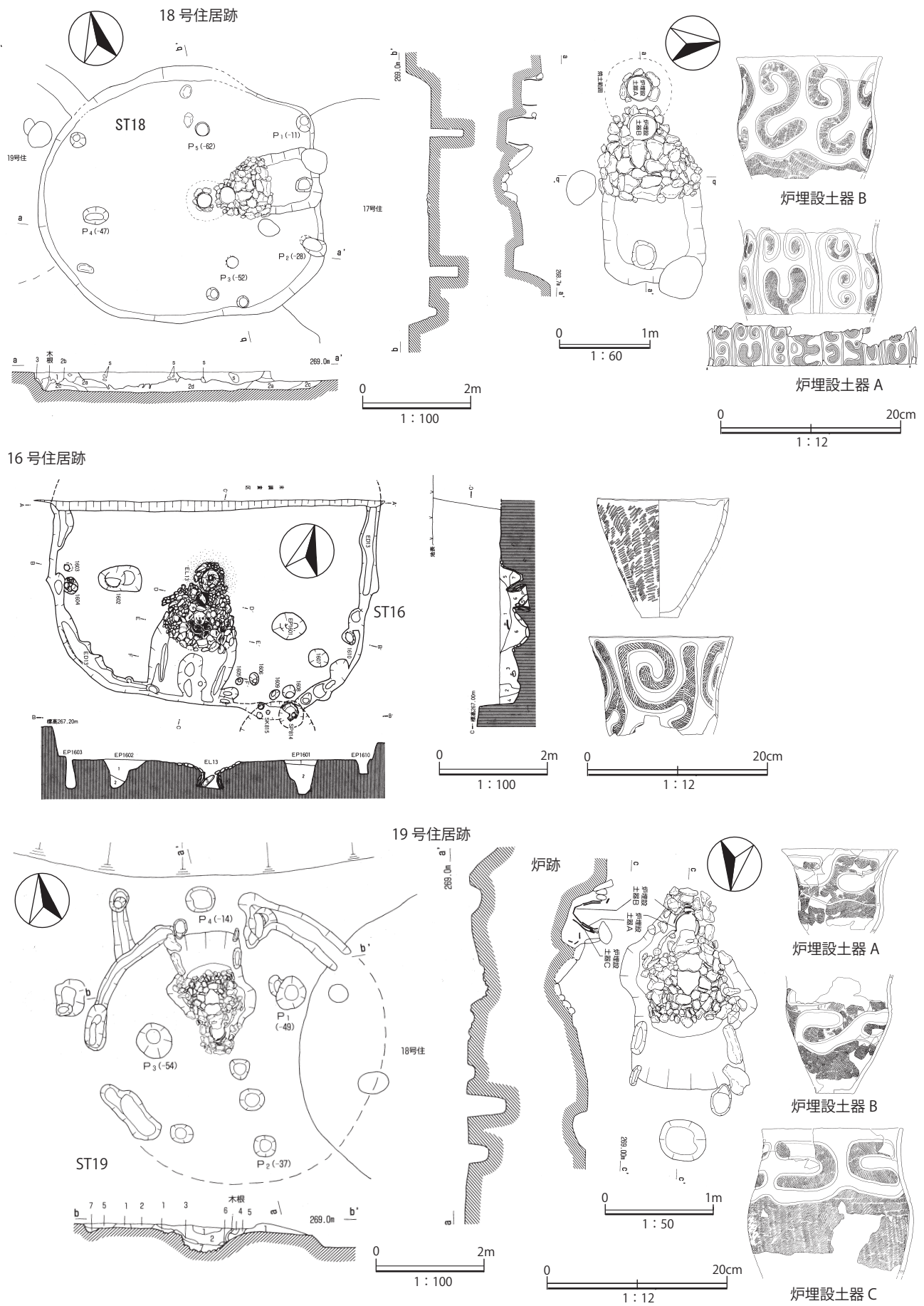


図 19 長者屋敷遺跡 16・18・19号住居跡

藤 1984)、住居跡の炉埋設土器の時間差はほとんど認められず、追認するのは難しい。

集落規模が最も拡大するのが大木 10 式古段階であり、調査区内で検出されている住居跡で判断すると、同時期に並存するのは 5～6 棟と考えられる。

次の時期である大木 10 式中段階の住居跡であるが、調査区北西に 19・21 号の 2 棟がある。19 号は円形で直径 4.4 m、21 号住居跡は隅丸方形状で長軸 3.2 m と、どちらも規模は小型である。この時期も、調査区外などに住居跡が存在している可能性がある。

2 号住居跡や 24 号住居跡は細別時期がわからないため、大木 9～10 式のいずれかの時期に帰属すると思われる。7 号住居跡は複式炉は認められず地床炉があり、9 号住居跡は炉が認められない。居住施設ではない作業場やその他の性格が考えられる。

長者屋敷遺跡の竪穴住居跡には、大木 10 式古段階から中段階の時期の複式炉が認められる。

大木 10 式古段階の 1・3～5・11～13・16 号住居跡は、土器埋設部から石組部にかけてダルマ状を呈する複式炉である。規模の大きい住居跡は炉埋設土器が 2 個体、規模が小さい住居跡は 1 個体である。

1 号住居跡は炉の全長が 2.2 m、最大幅 1.2 m、変則的に 3 つの炉埋設土器を伴う (図 18 上)。

10～12 号住居跡の複式炉であるが (図 18 下)、10 号住居跡は埋設土器を 2 カ所備える複式炉を持ち、石組部に接する埋設土器は傾斜した状態で埋設されている。炉の全長は 1.7 m、最大幅は 1 m である。11 号住居跡は E L 8→E L 9 と作り替えがなされている。炉の規模は双方とも全長 1.8 m、埋設土器は 1 カ所である。12 号住居跡の複式炉は埋設土器を 2 カ所備え、前庭部がやや広がる形態を示す。炉は全長 2.3 m、炉の北側 50cm に焼土が幅 50×100cm の範囲に広がり、その中に小型の土器が埋設される。土器の周囲には小石が配置される。副炉と考えられる。

18 号住居跡や 16 号住居跡も埋設土器を 2 カ所持つ複式炉を備える (図 19 上・中)。18 号住居跡の炉埋設土器 A は渦巻文などが見られ、大木 9 式に近い文様構成になっている。

19 号住居跡は大木 10 式中段階で、複式炉はダルマ形の形態である (図 19 下)。炉の全長は 1.85 m で、作

り替えがされている。埋設土器は 1 カ所である。埋設土器 A・B には、沈線区画による波頭文が描かれている。

中期集落の住居分布域の中央やや西寄りの場所には、半截木柱遺構や墓塚と考えられる土坑が分布する (図 16)。

半截木柱遺構は四本柱構成であり、柱穴の深さは 85～125cm、直径約 50～80cm の木材を半截して使用している。柱痕間の距離は、南北で 3.3 m、東西で約 3.4～3.6 m である。柱穴の掘り方は、深い穴と浅く北東側にひろがる穴のセットになっている。半截木柱遺構に残されていた炭化材について樹種の同定が行われ、クリ材であることが判明している (パリノ・サーヴェイ 2000)。

半截木柱遺構付近には墓の可能性のある土坑が、南東には集石遺構が認められ、墓域および祭祀に関わる空間と考えられる³⁾。墓塚の可能性のある土坑として、11・12 号土坑がある (図 17)。直径 125～160cm の円形で、礫が密集している。また、直径 40～60cm の円形に角礫や円礫が敷かれた 1～4 号集石が検出され、中期末の時期と考えられる。その他、13 号住居跡の西側には中期末の時期と考えられる集石があり、半截木柱遺構の北側にも時期は不詳であるが、東西 6 m、南北 8 m の広がりをもつ集石 (1) と、東西 10 m、南北 7 m の範囲で概ね環状の広がりをもつ集石 (2) が検出されている⁴⁾。

(6) 朝日山地山麓の中期後葉・末葉の集落跡

長者屋敷遺跡の位置する長井盆地中央西側の朝日山地山麓には、中期後葉・末葉の集落跡が点在している。長者屋敷遺跡以外で調査が行われた遺跡について内容を紹介したい。

(a) 問答山遺跡

長井市勸進代字岡地内に所在する。長者屋敷遺跡の北東約 2.2km に位置する。東西約 140 m、南北約 90 m の規模をもち、大木 10 式期の集落跡である (岩崎 2002)。

平成 15 年の調査では、竪穴住居跡 2 棟、複式炉 1 基が検出された (図 20) (岩崎 2004)。1 号と 2 号住居跡は重複しており、1 号住居跡が新しい。2 号住居跡はダルマ形の複式炉を備えており、埋設土器は 2 カ所 3 個体が確認された (図 20-1～3)。炉埋設土器 B の内側に A が入れ子状になって出土した。住居跡の時期は、

炉埋設土器より大木 10 式古~中段階である。

1・2号住居跡より西側トレンチでも住居跡の可能性
がある遺構が幾つか検出されている。平成 16 年の調査
では、1 トレンチでピットと大型土坑の平面が、3 トレ
ンチで円形、楕円形状の遺構の平面が検出された(岩崎
2005)。遺構上面には、拳大の石がややまとまった状態
で検出されていることから、集落に伴う墓域が存在する
可能性も考えられる⁵⁾。

(b) 黒附遺跡

長井市川原沢地内に位置する。長者屋敷遺跡の南南西
へ約 1.2km に位置する。白山森の麓である。遺跡は元
スキー場の入口部にあたる。南側には水無川が東に向
かって流れ、標高は 233 m である。遺跡範囲は、南側
を流れる水無川の自然堤防に沿って営まれた東西 60 m
南北 90 m の範囲と推定される。

平成 22 年の試掘調査では、16 カ所のトレンチが調

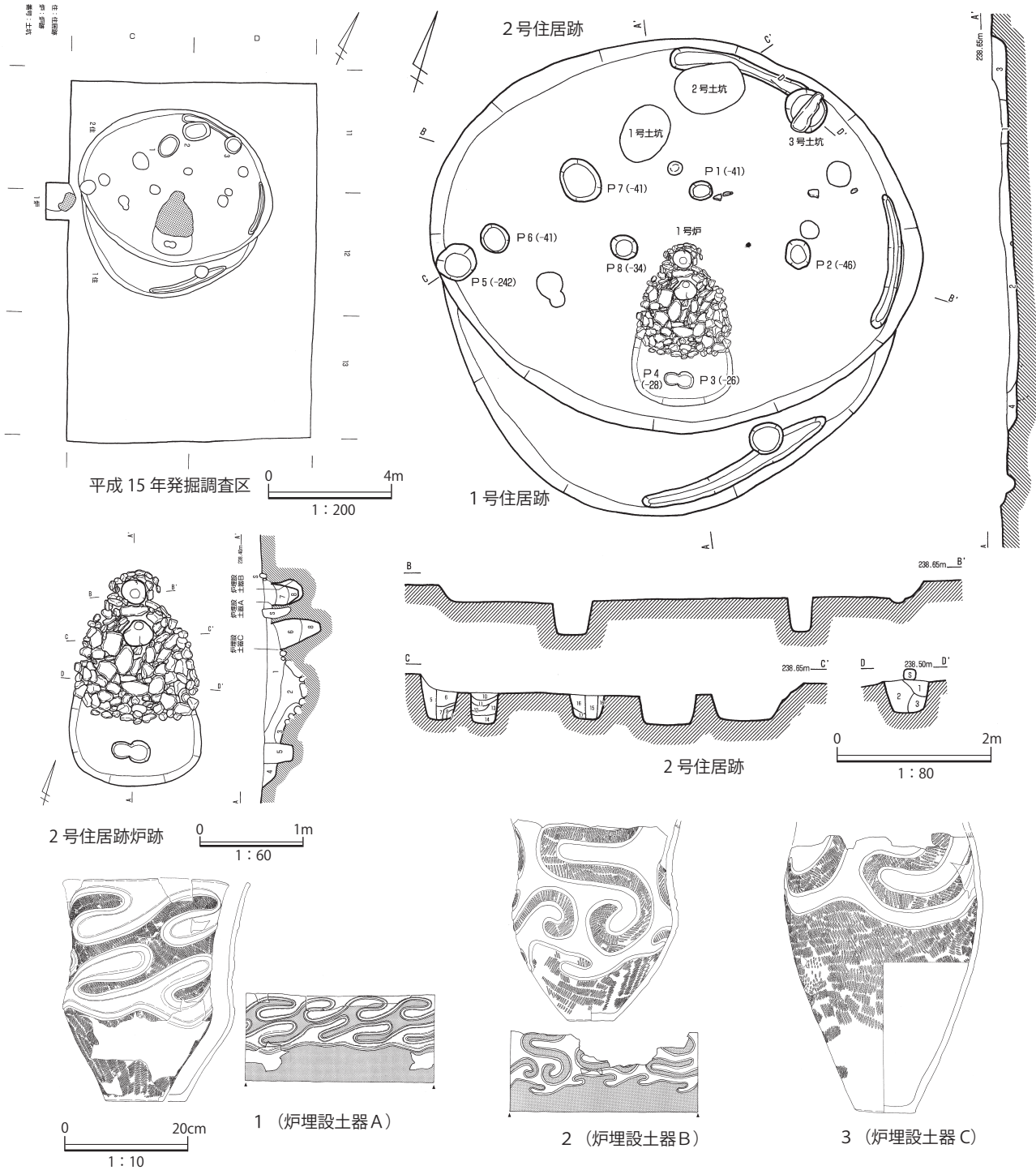
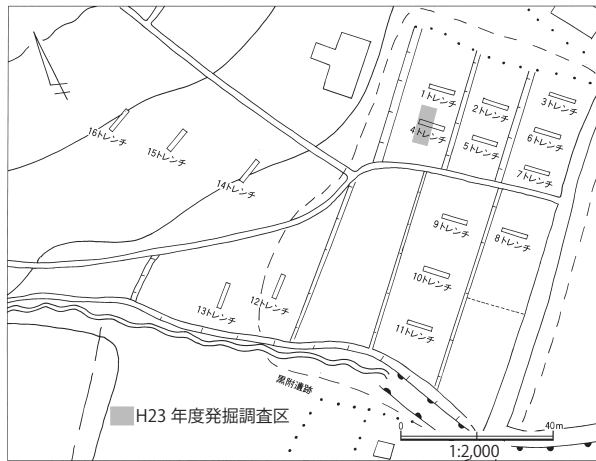
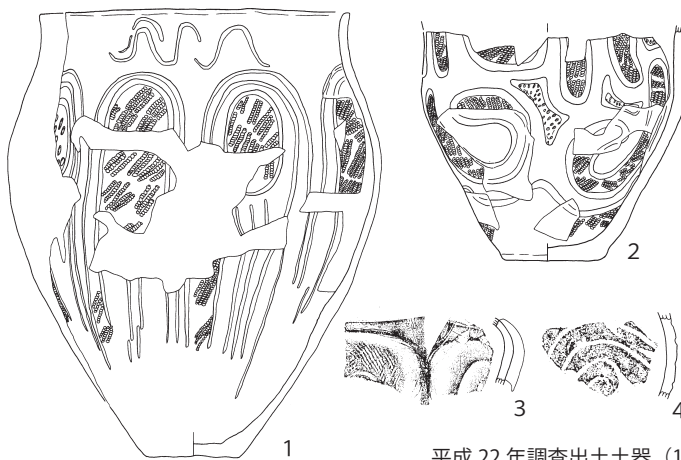


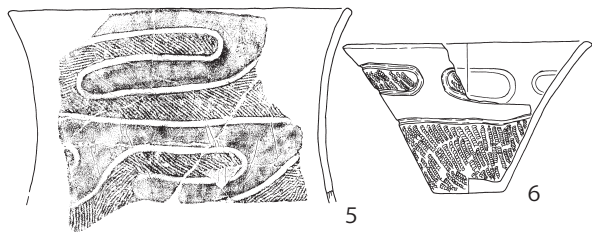
図 20 問答山遺跡の遺構と出土土器



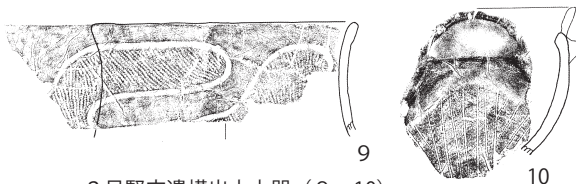
黒附遺跡調査概要図



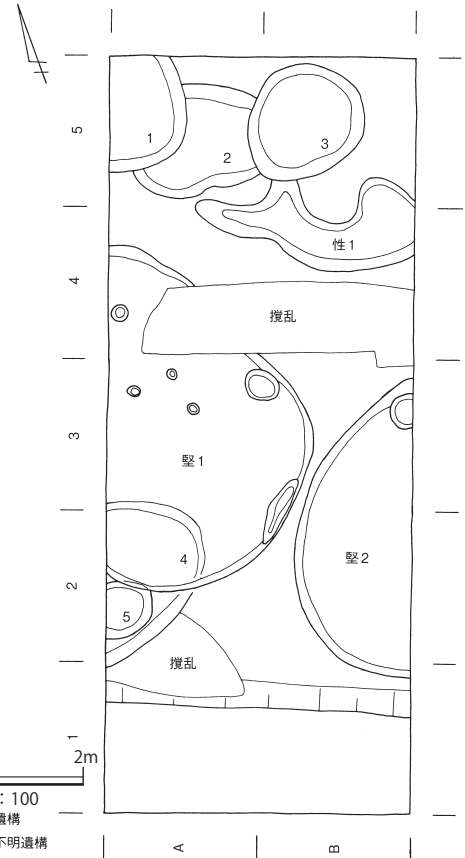
平成 22 年調査出土土器 (1~4)



1号竪穴遺構出土土器 (5~8)



2号竪穴遺構出土土器 (9・10)



黒附遺跡 H23 年度調査区遺構配置図

竪：竪穴遺構
性：性格不明遺構
番号：土坑

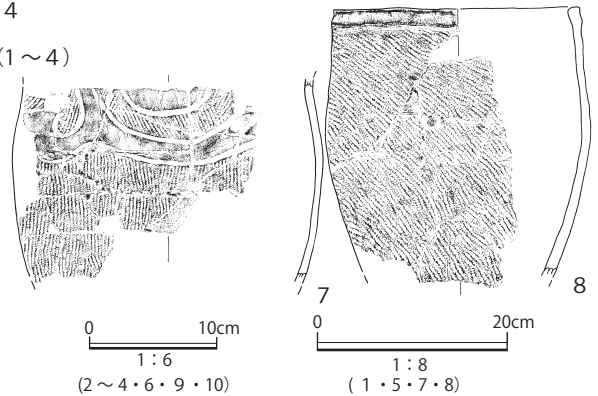


図 21 黒附遺跡の遺構と出土土器

査され、遺構のプランが確認された(図 21)。10 トレンチから正位の深鉢が出土した。墓となる埋設土器の可能性はある(岩崎 2011)。出土土器は、大木 9 式新段階から大木 10 式古段階である。平成 23 年の調査では(岩崎 2012)、4 × 10 m の調査区を設置し長軸 3 ~ 4 m の竪穴遺構 2 基、土坑 5 基、性格不明遺構 1 基が検出された(図 21 右)。竪穴遺構からは、大木 9 式中・新段階、

大木 10 式古・中段階の土器が出土しているが、時期的には大木 10 式古・中段階に帰属すると考えられる。

(c) 空沢遺跡

長井市寺泉字空沢西・入野川向に所在し、東流する野川が大きく南に曲流する部分の北側に張り出した段丘面に立地する。遺跡内には 2 段の段丘面があり、標高は 268 ~ 271 m である。山形県企業局による新野川第一発電所建設工事に伴い、4,100 m²について発掘調査が行われた(水戸部ほか 2005)。縄文早期・前期・中期・後期・晩期と断続的に利用されている。

平成 18 年に行われた山形県による発掘調査では、セ

ンター調査区に北接する部分の 150 m²が調査され、大木 8a 式期の土坑、大木 8b 式期のピットなどが確認されている (山形県教委 2008)。

縄文中期の遺構として、大木 10 式古段階の竪穴住居跡 1 棟、大木 10 式期の土坑などが確認されている (図 22 下)。複式炉をもつ ST82 竪穴住居跡は、推定直径が 3m 未満で小型である。他の中期の時期では、大木 8a、8b 式土器が遺物包含層より出土し、馬高式土器も認められる (図 22 上)。

後期初頭から前葉にかけては、貯蔵穴の分布が認められる。後期初頭は約 10 基で、後期前葉にかけて同じ場所に何回も設けられていたと考えられる。住居跡は確認

されていない。

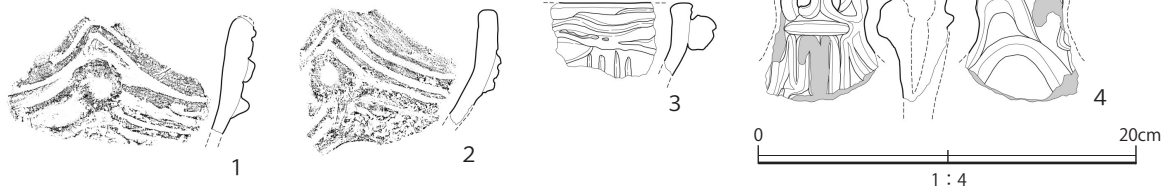
当遺跡は狩猟場や採集場所として、長期にわたって利用されていたと考えられる遺跡である。大木 10 式期の住居跡も、これらの作業に使用される一時的な居住施設として利用されていたものと思われる。

このように、長井市西側の朝日山地山麓沿いには、中期の大木 9・10 式期の集落跡が幾つか併存し、山間に入る河川上流には狩猟場や採集場があり、互いに関連を持ちつつ維持されていたと考えられる。

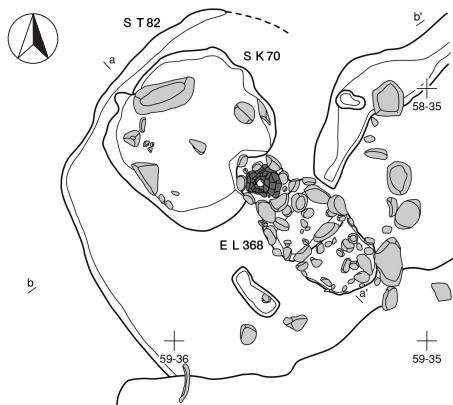
(7) 後期初頭～前葉 (初頭・南境 1・2 式期) の遺跡

盆地南端の白川流域には町下遺跡 (55)、郡之神遺跡 (52)、萩生川流域には石箱遺跡 (51) がある。町下遺

馬高式土器 (遺構外出土)

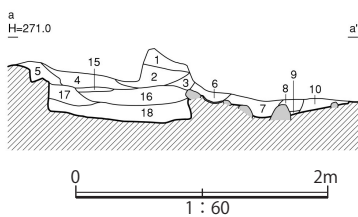
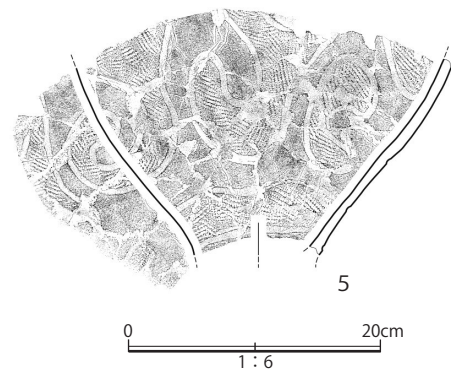


ST82 竪穴住居跡



ST82EL368 炉埋設土器

■ 石
■ 土器



後期初頭の SK72 土坑と出土土器

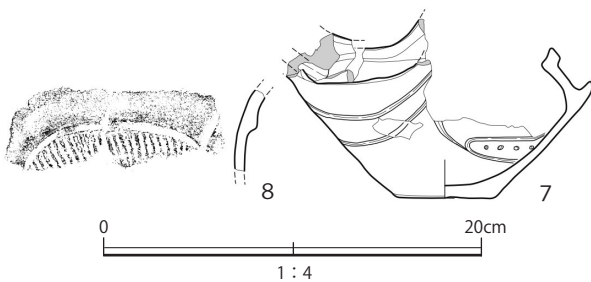
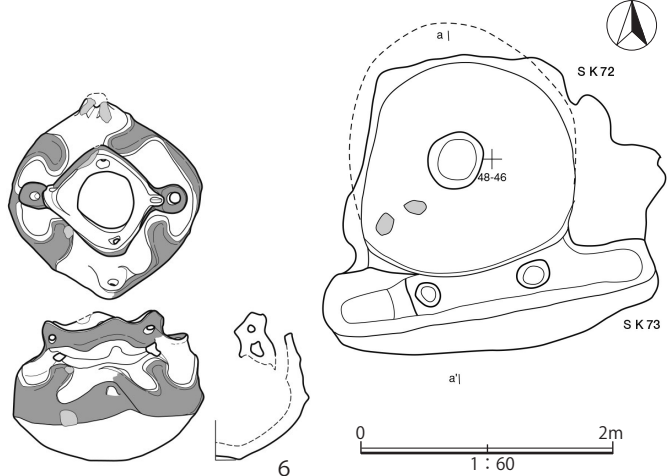


図 22 空沢遺跡の遺構と出土土器

跡には土坑などの遺構（阿部・長橋 1981）、郡之神遺跡では後期初頭の長楕円形状を呈する配石遺構や土坑などが確認された（手塚ほか 1979・須賀井ほか 1993）。石箱遺跡では後期前葉と思われる土偶が出土している（加藤 1980）。盆地中央部の低地や西側の段丘沿いにはいくつかの遺跡が分布する。中里 B 遺跡（17）では中期末から後期前葉にかけての配石遺構や土器埋設遺構などの遺構が検出されている（岩崎 2010）。唐梅遺跡（19）では中期末から後期にかけての集石遺構・墓壇・土坑などが調査され（岩崎 2010・2011）、墓域が形成されていることが明らかになった。この遺跡と周囲に中期末から後期前葉の集落がまとまって営まれていたものと推定される。盆地北側は、中期末に比べて遺跡数が少ない。中町西遺跡（37）などに主な集落が存在している可能性がある。

（8）後期初頭から前葉の集落跡

（a）中里 B 遺跡

長井市草岡に所在する。長者屋敷遺跡の東約 450 m、唐梅遺跡から南西に約 3km の位置にある。東西 100 m、南北 80 m の小丘陵上に立地する。平成 21 年に遺跡台帳整備にかかる調査が行われた（図 23）（岩崎 2010）。配石遺構 4 基、土坑 2 基、ピットなどが精査されている。直径約 1 m の広がりをもつ 11 号配石遺構は、拳大から人頭大の大きさ礫を配し、中央に埋設土器を伴う。墓と考えられる。12 号配石遺構は、長径 85cm で円形の土坑縁に人頭大の礫を配置し、内側に拳大の礫を配する。中央部に大型の土器片を伴う。土坑と配石の時期は、後期初頭・前葉が中心になると考えられる。調査地点は台地縁辺で墓域と考えられ、より西側に住居跡などが存在するものと思われる。出土した遺物は、大木 9 式、大木 10 式新段階から後期初頭・前葉の時期である。後期の土器には、初頭に認められる方形区画文の土器（図 23 - 5・10）、三十稲場式土器（図 23 - 14・15）、綱取式土器（図 23 - 9）、堀之内 1 式土器に併行する土器（図 23 - 8・16）が認められる。当遺跡は長者屋敷遺跡に近い位置にあり、時期的に後出であるため、長者屋敷遺跡の中期末集落の移転先の可能性がある。

（b）唐梅遺跡

長井市の北西部、勸進平字唐梅・飯沢に所在し、朝日山地山麓に位置する。遺跡範囲は東西 180 m、南北

130m と推定される（図 24 上）。現況は畑地・果樹園・宅地となっている。標高は約 240 m である。長井市教育委員会によって、V 次にわたる発掘調査が行われた。遺跡の主な時期は、中期末大木 10 式期から後期前葉にかけてと考えられる。

第 IV・V 次調査で、面積 80 m² の調査区内に墓壇と考えられる遺構が密集して検出された（図 24 下・岩崎 2011・2012）。検出された遺構は、埋設土器 7 基、集石 51 基、土坑 39 基、ピット 16 基などである。

集石は、円形・楕円形・不整形を呈し、直径約 1m 前後、確認面で拳大から人頭大の礫が密集した状態で検出された（図 24 下左）。集石の掘り方は、深さ 20cm に満たないものが多い。集石の下位からは土坑状の掘り込みが確認された遺構も数カ所で確認されたが（集石 45・47・48・50・97 など）、ほとんどの場合は集石掘り下げ後の調査で新たに確認された土坑が多く、集石と土坑に特定の対応関係はないという。遺物の出土は多く、中期末から後期前葉の土器片が含まれる（図 25 下）。この地点に形成された包含層に由来するものと思われる。完形の石鏃や円盤状土製品が出土するケースが多い。集石の多くは後期初頭から前葉の時期である。

土器埋設遺構の多くは、集石直下の検出である。埋設するにあたり、口縁部を打ち欠き斜位に埋設されるのが多く認められる。比較的大型の深鉢が用いられ、底部の穿孔はない（図 25 上）。集石検出面で確認されたと考えられる 3 基（12・29・30 号土器埋設遺構）は、後期初頭・前葉に位置づけられると考えられる。その下の土坑群の面では 4 基が検出された。大木 10 式期に含まれるもの（70・80・130 号土器埋設遺構）、中期末から後期初頭の時期と考えられるものがある（128 号土器埋設遺構）。

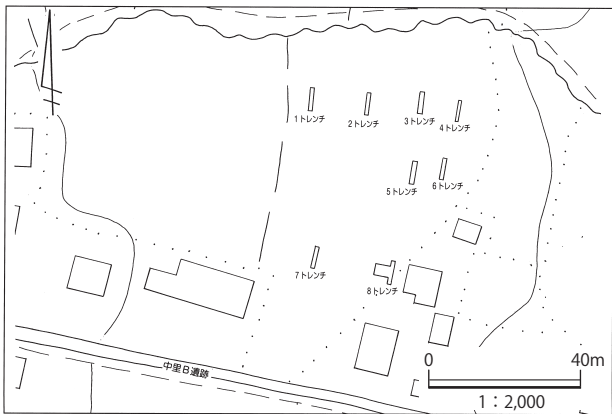
集石下の土坑群であるが、平面形は円形・楕円形・不整形で、規模は長軸 0.5 ~ 1.8 m とバリエーションがあり、多くは重複している（図 24 下右）。土器や石器類が数多く出土する。土坑群の多くは墓壇になると思われる。土坑群の構築には時期幅があると思われ、大木 10 式期にこの地点の土坑群の形成が始まり、後期初頭・前葉にかけて同じ時点で重複して構築され続ける。大木 10 式期と考えられる土坑は長軸が 1 m に満たないものが多いが、後期の土坑は長軸が 1.5 m を超えるものが見

られるなど大型化している⁶⁾。

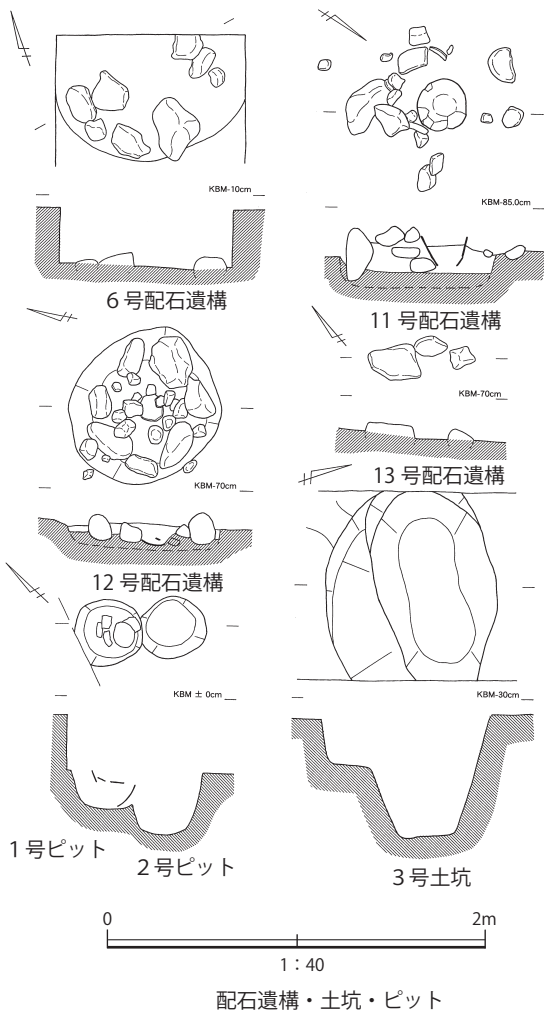
土坑からは土器片が多く出土するが、混入したものと
思われる。106 号土坑からは、ほぼ完形の南三十稲場
式の浅鉢が出土しており埋納と思われる(図 26 - 9)。
集石群と同様に石鏃などの完形石器や円盤状土製品など
も出土が見られる。

当遺跡の出土土器を確認する。最も古い時期は、大木

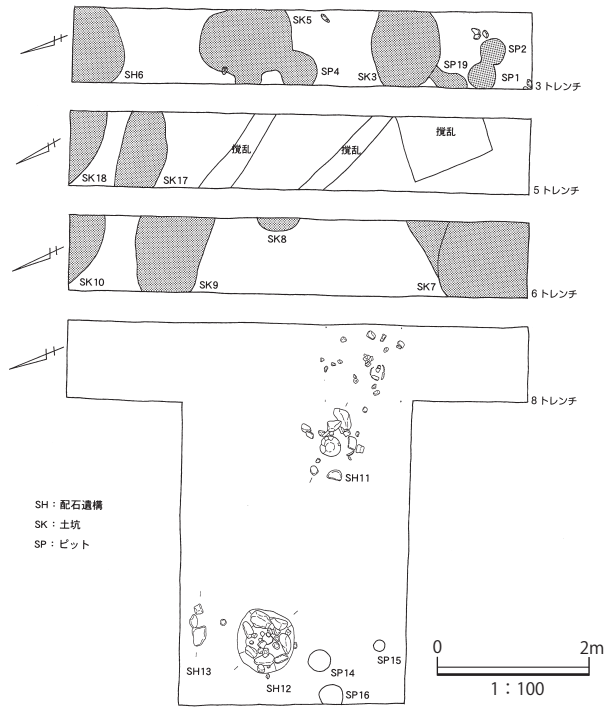
9 式土器である(図 26 - 14・15)。大木 10 式土器は
古段階(図 26 - 16)から新段階(図 26 - 17・18)
まで出土している。後期初頭の土器は、大木 10 式土
器の影響が残るもの(図 26 - 19・図 27 - 9)、隆帯
上に刺突を入れ、X 字状に沈線を入れるもの(図 26 -
21)、連続した刺突を入れるもの(図 27 - 7) などが
ある。その他、北陸に由来する三十稲場式土器(図 26



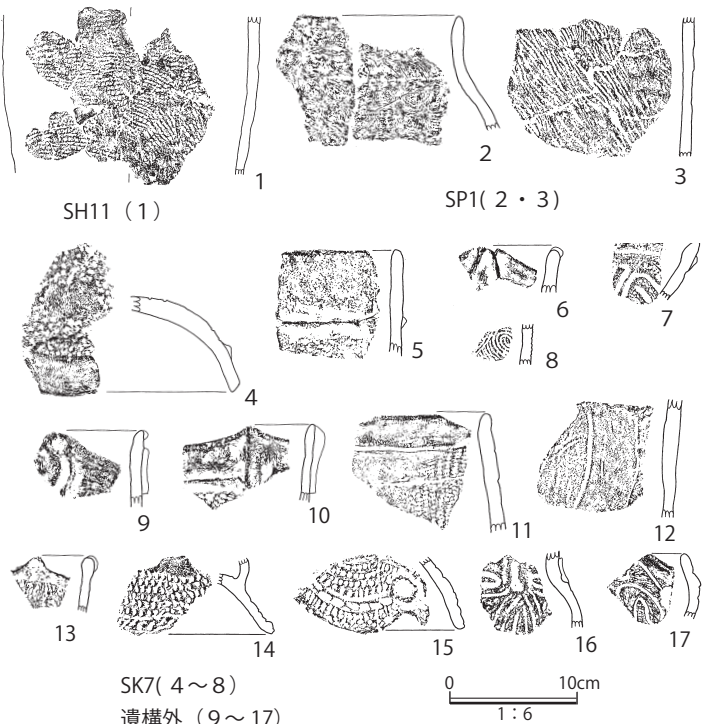
調査概要図



配石遺構・土坑・ピット

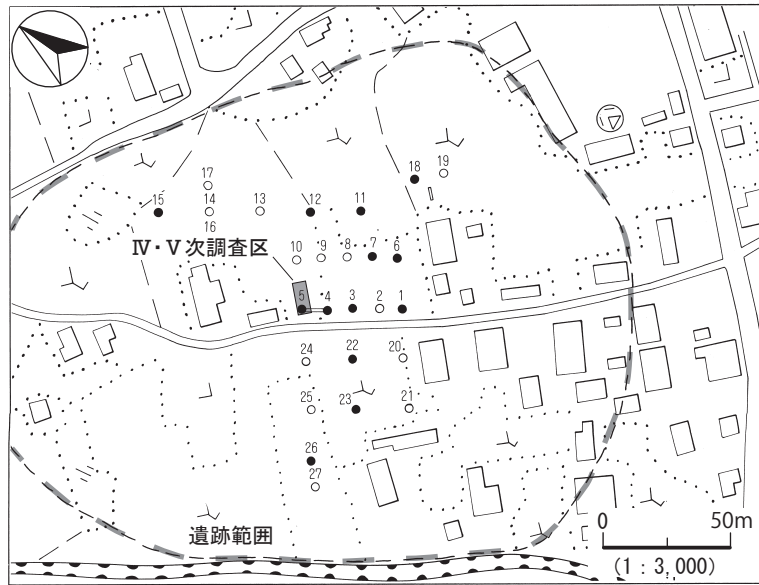


遺構配置図



SK7(4~8)
遺構外 (9~17)

図 23 中里 B 遺跡の遺構と出土土器



唐梅遺跡調査概要図

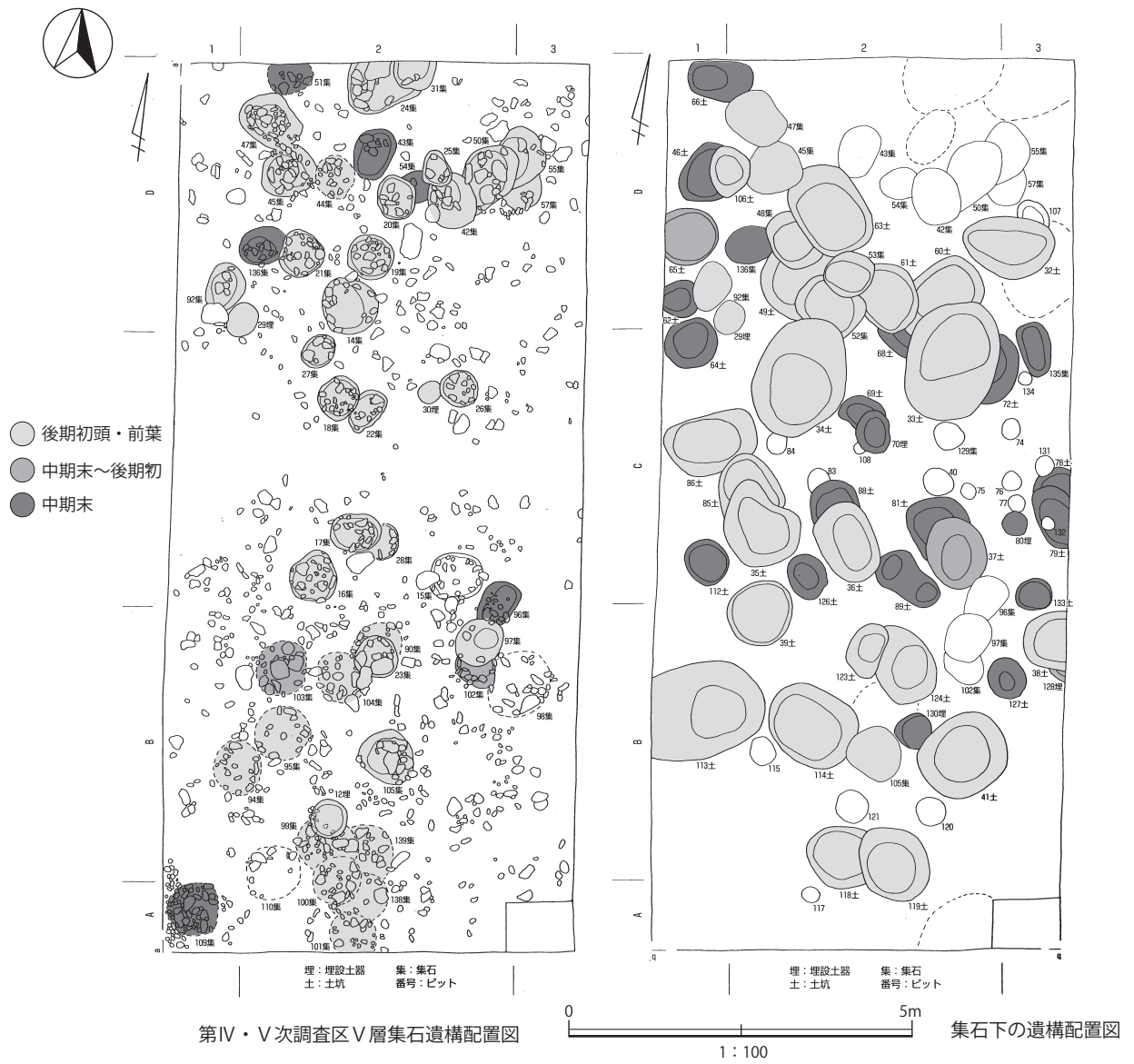


図24 唐梅遺跡調査概要図(上)・第IV・V次調査区遺構配置図(下)

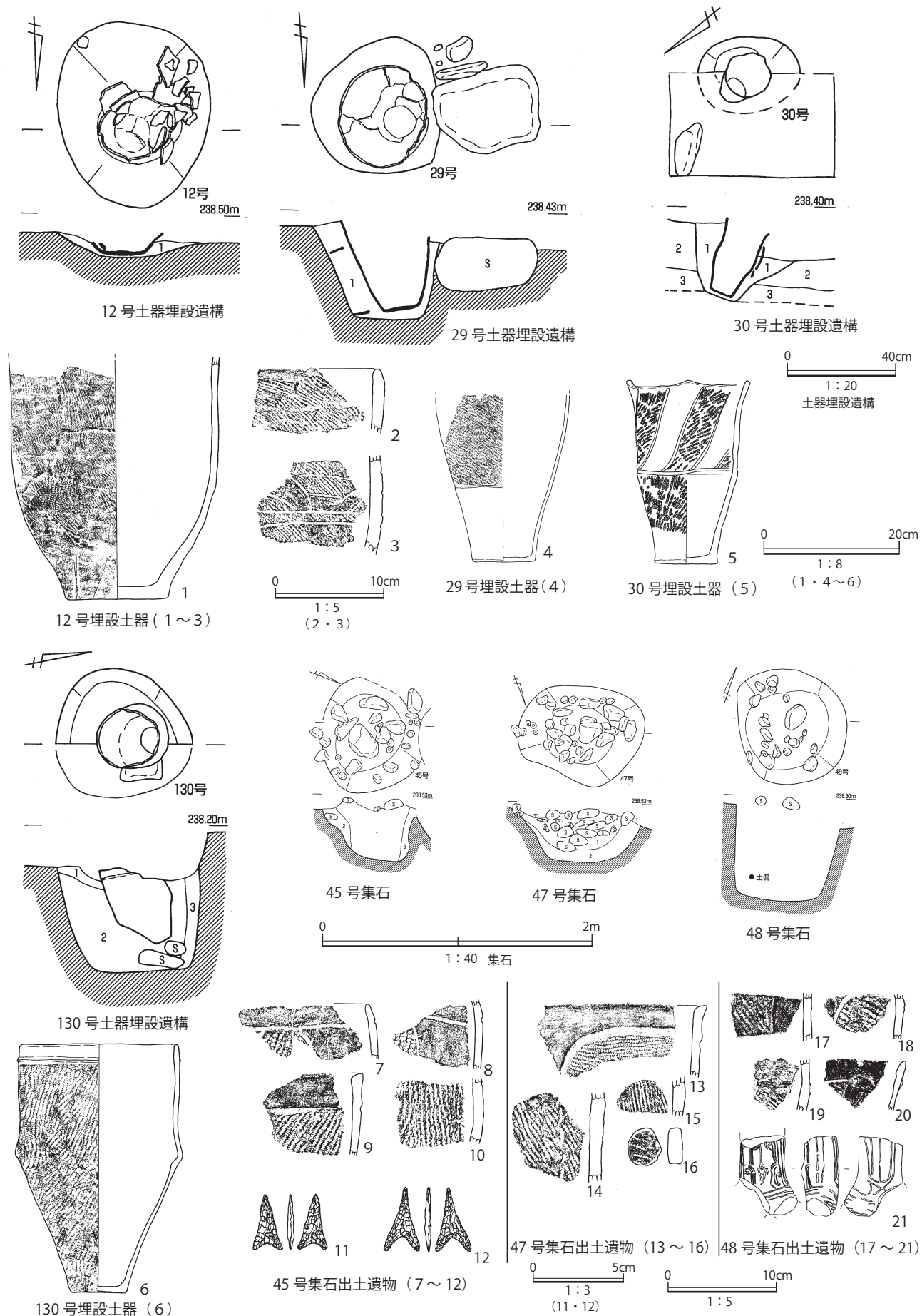


図 25 唐梅遺跡の土器埋設遺構・集石・出土遺物

一 3・図 27 - 11)、後続する南三十稲場式土器(図 26 - 13、図 27 - 10・12 ~ 17・19)、福島方面に由来する綱取Ⅱ式土器(図 27 - 1 ~ 4)、堀之内Ⅰ式土器に併行する土器(図 27 - 18・20)、堀之内Ⅱ式土器に併行する土器(図 27 - 33)、太平洋側の宮城方面に由来すると思われる南境貝塚7トレンチ6~8層の宮戸 1b 式より新しい土器群(後藤 2013)に併行するもの(図

27 - 22・23)、北東北の後期前葉十腰内Ⅰ式土器に併行するもの(図 27 - 24 ~ 32)などが見られる⁷⁾。長井盆地の後期初頭から前葉の土器には、周辺地域からの多様な影響が認められる。

当遺跡は、中期末から後期にかけて集落が継続して営まれる貴重な事例であり、この時期の墓域の変遷が確認される。東北北部では、後期前葉に大規模な環状列石な

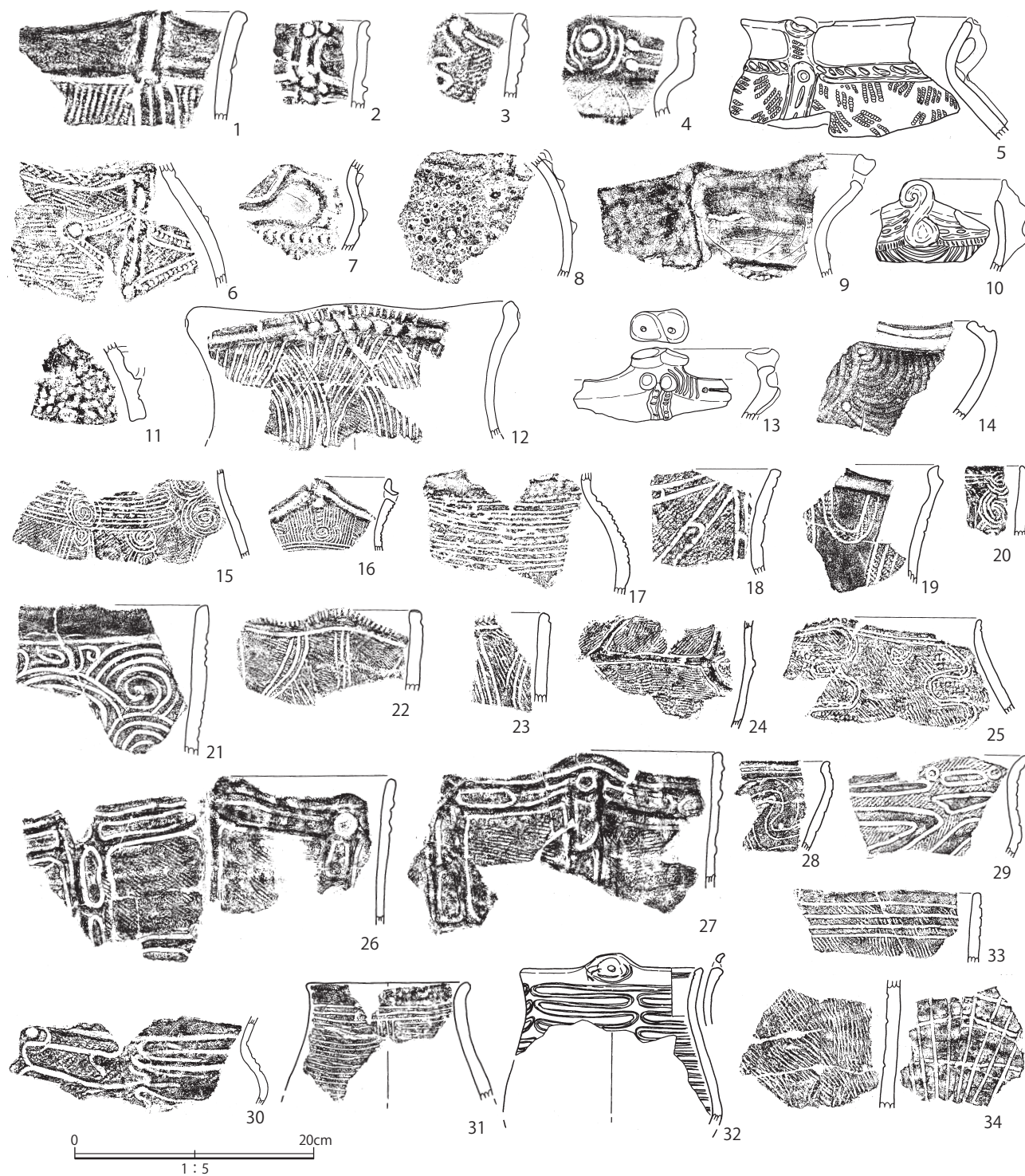


図 27 唐梅遺跡遺物包含層出土土器

どが構築されるが、当遺跡では墓域全体の範囲は未確定であるものの、小型の集石が集まって集石群のまとまりが形成され、それらが何群か集まって墓域が形成されていると考えられる。

8 まとめ

以上のように、長井盆地の縄文時代中期から後期前葉にかけての遺跡と集落の様相を見てきた。

長井盆地中央部では、中期前半から中頃については、長井市宮遺跡がこの地域の中心となる集落跡と考えられる。竪穴住居跡が密集して建てられ遺物量が多く、土偶や石棒、三脚石器などの祭祀遺物の他、北陸系や東関東系の土器も認められる。東関東系の土器は、米沢盆地にも出土が認められる。また米沢盆地は三脚石器の出土が多い。最上川沿いを通じてこの地域と往来し、情報を得ていたと思われる。また、北陸系土器の出土は、この系統の土器が多い小国盆地方面からの影響と考えられる。

中期中頃の大木 8b 式期の集落跡については、長井盆地内では明らかになっていない部分が多い。この時期に何らかの集落立地の変化があると思われる。盆地北部の石那田遺跡にはこの時期の集落があるが、中期末葉の時期は確認されていない。

中期後葉・末葉の集落跡については、長井盆地の西側の朝日山地山麓沿いの丘陵地に、長者屋敷遺跡をはじめとした集落跡が形成される。長者屋敷遺跡は、中期末の集落の全容が明らかとなった遺跡であり、集落中央部に土壙墓や配石遺構、半截木柱遺構などを備える。黒附遺跡も埋設土器などの墓域を備える集落跡になると考えられる。問答山遺跡も、全体像は明らかになっていないが、墓域を伴う比較的小規模な集落になるとと思われる。大規模集落は認められず、長者屋敷遺跡の内容に見られるように 5 棟前後の住居で構成される集落が山麓の各河川沿いに並存するものと思われる。岡ノ台遺跡もそのような集落の一つであろう。

後期初頭・前葉の集落跡であるが、朝日山地山麓では中里 B 遺跡など中期末の集落の近くに移転したりする遺跡もある一方、唐梅遺跡など中期末から後期にかけて同じ場所に継続してゆく遺跡もある。墓域は配石や集石が伴い、唐梅遺跡では土壙墓群が連綿と続き、その上に集石が構築されていく規模の大きな墓域が形成されてゆ

く様相が認められた。

本論の執筆にあたり、岩崎義信氏、小林圭一氏より御教示頂いた。記して御礼申し上げる。

註

- 1) 大木 9 式、1 0 式土器をそれぞれ古・中・新に区分する編年案によった(菅原 1999)。なお、関東地方の称名寺式に併行する時期は後期初頭とした。
- 2) 遺物については、発掘資料以外に遺跡の現地で大木 7a 式、8a 式土器の表採遺物を確認している。
- 3) 岩崎氏は、長者屋敷遺跡の半截木柱遺構について、建物跡可能性もあるとしつつ、木柱の断面は半円形や楕円形を呈するが半断面(弦面)の向きがまちまちで建物跡にはなじまないという宮本長二郎の見解を踏まえ、巨大柱列の可能性が強いと考えている。また現地での確認により、四本の木柱が二至二分の日の出・日の入り方位と関連している事を指摘し層的な役割をもつ施設ではないかと推測する(岩崎 2002a)。
- 4) 集石(2)は、全体として環状を呈しているように見える。ただし岩崎氏によれば、検出された礫は掘り方を伴うものではなく、人為的に配置されたものなのか基盤由来のものなのか識別がつかないものもあるため、注意を要するという。
- 5) 問答山遺跡の報告(岩崎 2005)に、平成 16 年の調査で環状列石の一部が検出されたとの記述があるが、調査を担当された岩崎氏に確認したところ、新しい時期(中近世)に伴うもので環状列石ではないと否定されている。
- 6) 唐梅遺跡の集石と土坑の時期は、報告書に掲載されている土器と新旧関係を基に推定したが、包含層からの混入の物が多く厳密な時期の特定はなお検討を要する。
- 7) 後藤勝彦は、南境貝塚 7 トレンチ第 6～8 層出土土器について、宮戸 I b 式よりも新しい土器群としている。本間宏は、この土器群について宮戸 I b 式新段階と呼称することを提唱している(本間 2008)。また唐梅遺跡の後期の土器の編年観は、岩崎氏による分類を基としたが、十腰内 I 式土器に併行する土器などは、他地域の諸要素が混在するようにも考えられ、単純にどの地域の系統と断定できない難しさがある。

引用文献

- 阿子島功ほか「第一章 地理」『長井市史 各論第一巻』pp.9-93
 阿部明彦・長橋至 1981『町下遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 57 集
 阿部明彦 1982「第四章 縄文時代中期」『村山市史別巻 1 原始・古代編』pp.271-398
 岩崎義信 1998『市内遺跡発掘調査報告書(6)』長井市埋蔵文化財報告書第 15 集
 岩崎義信 1999『市内遺跡発掘調査報告書(7)』長井市埋蔵文化財報告書第 16 集
 岩崎義信 2000『長者屋敷遺跡発掘調査報告書』長井市埋蔵文化財報告書第 18 集
 岩崎義信 2002a『縄文人と巨大木柱』山形県長井市古代の丘資料館
 岩崎義信 2002b『市内遺跡発掘調査報告書(10)』長井市埋蔵文化財報告書第 20 集
 岩崎義信 2003『市内遺跡発掘調査報告書(11)』長井市埋蔵文化財報告書第 22 集
 岩崎義信 2004『市内遺跡発掘調査報告書(12)』長井市埋蔵文化財報告書第 24 集
 岩崎義信 2005『市内遺跡発掘調査報告書(13)』長井市埋蔵文化財報告書第 25 集

- 岩崎義信 2006『市内遺跡発掘調査報告書(14)』長井市埋蔵文化財報告書第 26 集
- 岩崎義信 2008『市内遺跡発掘調査報告書(16)』長井市埋蔵文化財報告書第 28 集
- 岩崎義信 2010『市内遺跡発掘調査報告書(18)』長井市埋蔵文化財報告書第 30 集
- 岩崎義信 2011『市内遺跡発掘調査報告書(19)』長井市埋蔵文化財報告書第 31 集
- 岩崎義信 2012a『市内遺跡発掘調査報告書(20)』長井市埋蔵文化財報告書第 32 集
- 岩崎義信 2012b『唐梅遺跡発掘調査報告書』長井市埋蔵文化財報告書
- 柏倉亮吉 1954「第二章 先住民族」『荒砥町誌』荒砥町誌編纂委員会 pp.3-9
- 加藤稔編 1980『萩生石箱遺跡—第一次発掘調査報告—』飯豊町教育委員会
- 菊地政信 2006『台ノ上遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 88 集
- 後藤勝彦 2013『仙台湾沿岸貝塚の基礎的研究Ⅱ—南境貝塚—』
- 佐藤正四朗 1984「第一編 原始時代の長井」『長井市史第一巻 原始・古代・中世編』pp.3-318 長井市
- 白鷹町史編纂委員会 1977「第二章 原始時代」pp.31-108 白鷹町
- 須賀井新人・眞壁建 1993『郡之神遺跡第 2 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 191 集
- 菅原哲文 1999「山形県における縄文中期の土器様相—中期後半の編年を中心として—」『山形考古』第 6 巻第 3 号(通巻 29 号) pp.37-55 山形考古学会
- 菅原哲文 2015「最上川上流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』第 8 号 pp.50-70 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文 2019a「第二章第二節 縄文時代中期の長井」『長井市史 通史第一巻・原始・古代・中世編』pp.105-148 長井市
- 菅原哲文 2019b「山形県長井市宮遺跡出土の中期縄文土器」『山形考古』第 48 号 pp.11-21 山形考古学会
- 手塚孝・佐藤正俊・佐藤義信 1979『郡之神遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 23 集
- 長井市教育委員会 1981『長者屋敷第 3 次調査概報』
- 長井市教育委員会 1987「宮遺跡緊急発掘調査現地説明会資料」
- 長井市教育委員会 2016『長者屋敷遺跡発掘調査説明資料』
- 名和達朗・渡辺薫 1994『岡ノ台遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 15 集
- パリオ・サーヴェイ株式会社 2000「半截木柱遺構から出土した炭化材の年代と樹種」『長者屋敷遺跡発掘調査報告書』pp.61-63
- 本間宏 2008「南境式・綱取式土器」『総覧縄文土器』pp.544-551
- 水戸部秀樹ほか 2005『空沢遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 144 集
- 山形県教育委員会 2008「分布調査報告(34)」山形県埋蔵文化財調査報告書第 208 集
- 図 9 : (菅原 2019a : 図 2 - 49 - 1) 改変
- 図 10 : (菅原 2019a)
- 図 11 : (岩崎 2003)
- 図 12 : (岩崎 2006)
- 図 13 : 1・2・7・10・11 (阿部 1982)
- 図 13 : 3・4・5・9 (菅原 2019a)
- 図 13 : 6・8 (菅原 2019b)
- 図 14 : 1・2・4・9・10 (岩崎 2003)
- 図 14 : 6 (岩崎 2006)
- 図 14 : 3・5・7・8 (菅原 2019a)
- 図 15 : (菅原 2019a : 図 2 - 66) 改変
- 図 16 : (菅原 2019a : 図 2 - 80) 改変
- 図 17 : (岩崎 2000)
- 図 18 : (佐藤 1984)
- 図 19 : 18 号住居跡・19 号住居跡 (岩崎 2000)、16 号住居跡 (佐藤 1984)
- 図 20 : (岩崎 2004)
- 図 21 : 概要図 (岩崎 2011)、1 ~ 4 (岩崎 2011)、遺構配置図・5 ~ 10 (岩崎 2012a)
- 図 22 : (水戸部ほか 2005)
- 図 23 : (岩崎 2010)
- 図 24 上・25・26 : (岩崎 2012b)
- 図 24 下 : (岩崎 2012b : 第 3・4 図) 改変
- 表 2 : (菅原 2015 : 表 9 ~ 11) 改変

図版出典

- 図 1・2 : (名和・渡辺 1994)
- 図 3 : (名和・渡辺 1994 : 第 2 図) 改変
- 図 6 : (名和・渡辺 1994)
- 図 7 : (名和・渡辺 1994)
- 図 8 : 国土地理院発行 5 万分の 1 地形図「玉庭」・「米沢」・「赤湯」・「手の子」・「荒砥」・「朝日岳」を 49% に縮小して使用。